レニンは流刑地でどんな風に暮したか？　それについて當時ミヌシンスク流刑地にゐたフェ・レングニク君は、詳しく私に談して呉れた。次ぎは同君の話の内容である。

×　×　×

『同志達の交情は頗ぶる親しみぶかく、警察が嚴禁してゐたにも拘はらず、お互ひに頻繁に訪問しあつた。一八九九年の夏、ウラデミル・イリイッチの首唱で、その後肺病で死んだ同志ワネフが住んでゐたエルマコフスコエ村で、流刑囚秘密大會が開かれ、十七人の同志が集まつた。此の大會でレニンは、檢擧に漏れたロシア社會民主派の一部がロシア革命運動にとつて、極めて有害な方向轉換を行つた事について報告した。彼は「その連中は、ロシアの勞働者は經濟狀態の改善のためにのみ鬪爭すべきであると云ひ、之によつて勞働階級は政治鬪爭をブルジョア政黨にまかすべきである、といふ見解を强調してゐるのである」といつた。レニンは、彼が受取つた、さうした見解の書かれてある文書を朗讀した。そして彼は、集まつた同志達に向つて、ロシア勞働運動をブルジョア政黨に支配させる虞れのある、此の危險な潮流に對して、斷乎たる鬪爭が必要であると云つた。この文書（クレド）に對する抗議書は、レニンの提案に僅かな修

正をして、十七人の同志から成る流刑囚大會の名をもつて滿場一致で可決され、ロシア及び外國の各方面にそれ〴〵發送された。當時、我々とまつたく同意見であつたプレハノフは、之をロシア内に廣く頒布するために印刷に附した。此の十七人組は、後年、これらの有害なブルジョア的見解に對して組織的鬪爭を行ふことを任務とした、「イスクラ」(火花)派の柱石となつた。

レニンは流刑地に居ながら、かれの深遠な著作をもつて、彼が一八九五年春の外國行當時に知り合つた「勞働解放」團(プレハノフ、アクセリロオド、ザスリッチ等)と頻繁に連絡し、またペテルブルグ、モスクワ、その他の都市の同志等とも書翰を交換して非常に活動した。又彼は流刑地生活の大部分を、革命運動或はマルクス哲學の、復雜な、興味ある問題を討議した長い手紙を交換することに費した。

ウラヂミル・イリイッチは、いつでも愉快な、深味のある、いゝ話相手であつたばかりでなく散歩、狩獵、氷滑り、水泳、將棋(シャフマト)などには、彼はいつも好んで加はつた。そして常に凡てに上達した。また何時でも非常に眞卒な、魅力のある、同僚的素朴さをもつて、皆を愉快と生氣の

中に引入れた。一人の同志と雖も、此の明敏な、やさしい、素朴な、——誰に向つても決して其の學問と實際の問題における偉さを鼻にかけるやうなことのない彼を、好かずには居られなかつた。彼はすべての人に向つて、殊に黨友に向つては——きわめて冷たい氷のやうな人間でさへ、彼の前では融然として、彼の生涯の親友となるやうな——温かさと熱い同情とで接してゐた。

また、ア・クルウチナ君は、西伯利におけるレニンの生活の模様を、次のやうに書いてゐる。

『ウラヂミル・イリイッチ・レニンは、一八九七年にペテルブルグから、警察の監視付のもとに、三年間の豫定で、エニセイ縣へ流されて來た。

その年の五月、レニンは二人の憲兵に護送されてミヌシンスク郡シュシェンスコエ村に着き、其處で流刑期の終るまで暮した。』

四　流刑地での私生活

クルウチナ君の話はつゞく。——『レニンは、農夫ズイリャノフの家に寄寓した。ズイリャノ

フは、レニンの賄費として、國庫支辯の七留四十哥（コペク）づゝを、毎月の食費及び住宅費として支拂はれてゐた。

レニンを常時監視するために、特に警察からザウサイロフといふ男が任命された。彼は曹長あがりの典型的な番犬であつた。

レニンの生活は孤獨であつた。いはゆる土地の「上流階級（アリストクラット）」とは交際もなく、讀書と著作のために非常に多くの時間を費した。今尙ほシュシェンスコエ村に住んでゐる農夫ザヴェルトニンとエルマコフとは、レニンのことをよく覺えてゐて、彼との交際を追懷してゐる。

レニンの新らしい居住地における最初の交際は、些やかな雜貨店の主人ザヴェルトニンとの間に始められた。彼は其の店で用箋を買ふだけであつたが、店に並べられた用箋はレニンによつて隔日ぐらゐに使ひ盡された。ザヴェルトニンは不思議に思つた。

「あなたは一體どういふ人です？」

ザヴェルトニンは我慢し切れなくなつて顧客にたづねた。

「僕は政治犯人だ」――ウラヂミル・イリイッチは簡單に答へた。それから交際が始まつたので

ある。ザヴェルトニンは、

「私は、警察の役人、役場の書記、坊さん達と交際してきた。彼等は誰でも政治犯人といへば惡漢としか思へないやうに我々に談してゐた。私はウラヂミル・イリイッチと知り合つてから政治犯人といふものに全く別の考へをもつ様になつた」と語つてゐる。ザヴェルトニンはレニンを時折自分の所へお茶に呼んだ。レニンは出かけて行つて談しこんだ。

レニンはザヴェルトニンに簡單な算術の手ほどきをしてやつた。彼はこの新しい知己から、前には考へもしなかつた色々なことを知つた。ザヴェルトニンは、殊にはつきりと彼の記憶に浸み込んでゐる一つの事件を追憶してゐる。

ある時、レニンはお茶に呼ばれてザヴェルトニンの家にゐた。窓を通してちらりと往來に制帽の影が動いた。ザヴェルトニンがそれをレニンに知らせた時には、もう部屋の中へ檢事補と憲兵大尉と憲兵下士が入つて來てゐた。

挨拶もせず、帽子も取らず、立つたまゝで「レニンの書齊は何處だ?」と訊いた。

それから綿密な捜索がはじまつた。机、轉がつてゐる紙片、書類、書籍を調べた。

數語の官僚式な訊問をしてから彼等は帽子を脱いだ。そして官僚式の態度を改めた。ザヴェルトニンの眼には忽ち「長官」の貫祿が剝げて見えた。彼等は何か特別な威力――レニンの智力に打ちひしがれたものゝやうに小さく見えたのである。その日に、數時間の後に、長官はまたザヴェルトニンの所へやつて來て、嚴然として詰問した。

「よほど前からレニンと交際してゐるのか？」

「どうしてお前は彼と知已になつたか？」

「ウリヤノフはシュシェンスコエ村から何處かへ出かけるか？」

「彼は農民達と何んな話をするか？」等、ザヴェルトニンは、レニンから算術と簿記を習つてゐること、ウリヤノフは何處へも出かけず、誰とも交際をしてゐない、まつたく孤獨生活を送つてゐるから彼について詳しく知らせるやうな事はない、と答へた。ザヴェルトニンは、一たい之からも交際を續けて差支へないのか、と尋ねた。

この質問に對して憲兵大尉は、

「無論、無論、いゝ所ぢやない、しなくちや不可ない。第一に彼はお前のためになる。第二に

お前は彼を監視しなくちやならん。そして氣のついたことは何でも我々に知らせなくちや！」

といつた。

長官はザヴェルトニンに旨を含めて立ち去つた。

ある時、レニンは閑つぶしに農夫ストロガノフに將棋を教へた。

ストロガノフはすつかり將棋に夢中になつて、自分の先生と可なりよく鬪ふやうになり、もう一番もう一番とつゞけた。

ストロガノフの願ひはイリイッチに王手を喰はす事であつたが、それは徒勞であつた。ストロガノフは小一時間も手を考へて打つたが、勝負の終り頃になるといつも昂奮しはじめ、そして敗北した。

イリイッチはいつも變らず冷靜に、人のよさゝうな微笑を浮べて、相手に「王手！」を宣告するのだつた。

ザヴェルトニンは勝氣な將棋弟子ストロガノフと、冷靜な、沈着な、快活な微笑を含んだ將棋の先生について「どうしてストロガノフにイリイッチを敗かす事が出來るものか。イリイッチが

全力を出して「王手」と來たら、もうお終ひだつた」と云つた。

ある時、イリイッチはシュシェンスコエ村役場へ出かけて彼の所へ許嫁が母と一緒にやつて來るので結婚しやうと思ふんだが、誰か、二三室の、臺所付の家を借す者はないかと尋ねた。

その頃村役場に勤めてゐた農夫エルマコフは、ペトロワといふ女主人の家屋の一部に、イリイッチのために部屋を探してやつた。

間もなくナデジダ・コンスタンチノヴナ・クループスカヤ女史が、かの女の母と共にやつて來た。彼女もやはり流刑に處せられたので、彼女がもしウリヤノフと結婚するなら——といふ條件でシュシェンスコエ村に住むことを許されたのであつた。

若い二人はペトロワ方へ落着いて新生活をはじめた。ナデジダ・コンスタンチノヴナの母は家計を切盛りし、イリイッチとナデジダ・コンスタンチノヴナとは、終日机に向つて働きつゞけてゐた。曹長あがりのザウサイロフは、その監視下にあるイリイッチから眼を放さなかつた。

が、概して彼に好意をもつてゐた。

イリイッチは監視人の許可なしには獵にさへ行けなかつた。稀に書籍を買ふためにミヌシンス

ク市などへ行く時には――無論、さうした旅行の際には、その都度、地方警視か、又は憲兵隊長の、特別の許可が要つた。

ウラヂミル・イリイッチの許に來る、すべての信書はミヌシンスクで檢査された。

イリイッチの居宅は、非常にしば〳〵捜索をうけた。が、事實において功果は少しも得られなかつた。

イリイッチは、彼をめぐる嚴格な監視を、大して氣には止めなかつた。終日、彼は緊張した仕事のうちに暮してゐた。

彼は毎日、必らず散歩に出かけた。そんな時には、何時でも後ろ手を組んで、頸を垂れて――彼は散歩時間には、いつも深い思索に耽つてゐるといふ、印象を與へるのであつた。』

クルジャノヴスカヤ女史は、深い愛着をもつて、此の流刑時代を追想してゐる。

『一八九六年に檢擧されてから、私には、ペトログラドの同志達との二年に亘る連絡杜絶時代がやつて來た。一八九八年に、ミヌシンスキイ郡で、其處へ流されて來た連中と落ちあつた。ウラヂミル・イリイッチ（レニン）、ナデジダ・コンスタンチノヴナ（レニン夫人）、クルジャノ

ヴスキイ、スタルコフ、レペシンスキイ、彼都（ピイテル）の勞働者シヤポル、パニン、エングベルト、波蘭社會民主黨の一派の、チェカリスキイ、コワレヴスキイ、プロミンスキイ、その後、エニセイスキイ郡から轉送されて來た彼都（ピイテル）兒（ッコ）のレングニク、ワネフ、シリヴィン等と邂逅した。かうしてミヌシンスク郡の各地にばら撒かれてはゐたけれども、つい此の間まで一緒に働き、同じ傾向と思想とをもち、密接な關係をもつた親しい仲間（カンパニー）が集つた。

皆の間の連絡は、手紙とお互ひの訪問、また色々と體裁のいゝ名儀をつけて、大會さへが催された。流刑地における社會民主々義者の中心は、無論、イリイッチだつた。彼はすべての同志等と手紙を往復し、自分の手にあらゆる連絡の糸を結びつけてゐた。彼が主動者となつて我々各自の所へロシアから（釋註―一般にロシア人は西伯利では歐露をロシヤと呼ぶ）送つて來る有ゆるロシア及び外國の書籍新聞、雜誌の交換會が組織されてゐた。

レニンの全生活は、愉快な、活動的な、內容の豐富な、そして緊張したもので、それによつて皆なを率ゐ、流刑地だからといつて、氣を弛めないやうに、生活の基調を作つて行つた。

我々の流刑地には、此のやうにして倦怠も、空疎も、放縱も、不規律な氣分や汚ない問題も

起らなかつた。我々は、將來の活動について語り合ひ、勞働者達と勉強し、ロシアの問題を研究した――ほんとうに愉快な生活であつた。』

六　流刑地より歸る

一九〇〇年一月、レニンの流刑は滿期になつた。彼は自分の居住地を選擇するために通過證明書を與へられたので、一とまづ、當時多くの同志達が住んでゐたプスコフを選んで滯在することにした。大きな都會に住むことは、彼には禁ぜられてゐたのである。

だが、ナデジダ・コンスタンチノヴナの流刑はまだ滿期にならなかつた。そこで、彼女はレニンと一緒にウファに行き、母とともにそこに殘つた。レニンも少しの間ウファに滯留した。彼は其處で同地の社會民主黨員及び其地に流されてゐたツェルパ（現在人民委員會副議長）スヴィデルスキイ、クロフマル、ペトレンコ等と知り合つた。ペトレンコ君は、當時のレニンとの邂逅を、次のやうに描いてゐる。

『晩の七時頃、額は深く禿げあがつてゐたが、見たところ三十歳ぐらゐの若者がやつて來た。彼は我々の多くと同じやうに非常に質素な服裝をしてゐた。汚ない多套を着て、頸には毛糸の

襟巻をしてゐた。彼は外套を入口の所へ投げだして、灰色の短かい背廣とチョッキ、同じズボンといふ、いで立ちで部屋へ入つて來た。襯衣には古いけんちうの襟をつけ、黑い絹のネクタイを巻きつけてゐた。彼と一緒に若い女がはいつて來た。それはウラヂミル・イリイッチ・ウリヤノフが、妻君のナデジダ・コンスタンチノヴナ――舊姓クルプスカヤ女史と一緒に到着したのであつた。

イリイッチは間もなく（一九〇〇年二月十一日）、そこを去つたが、尙ほ最後の年を流刑地ウファに生活せねばならなかつたクループスカヤ女史は其處に殘つた。彼女が非常に敬愛してゐた老母と共に暮した住居は、政治犯流刑囚とイリイッチとの間の連絡所となつた。クループスカヤ女史の手を經て、彼と手紙を交換することができたので、我々は、公刊の定期出版物で、讀むことの出來ない、極めて興味のある政治上のニュッスを知ることが出來た。』

レニンはまた、當時彼の母が住んでゐたポドリスクと、クループスカヤ女史が流刑期を終るまで暮して居たウファとの間を、屢々往復した。彼がモスクヴやペテルブルグで活動することは、殆んど不可能であつた。憲兵本廳の保安部は何處に行くにも彼に尾行させた。今になつて憲兵本廳

の當時の史料を繰つて見ると、當時彼の一擧一動――彼が何處に居り、何處へ行き、誰とどれだけの時間會談したなどといふ事が、全部明白になつてゐたことが歴然とわかる。が、レニンは一ケ所にぢつとしては居られなかつた。プスコフは彼の根據地の一つとして定められてゐたのみ。當時此地には、政府の要視察人であつた多くの流刑囚がゐた。そのうち現在モスクヴにゐる人として――ストパニ、レペシンスキイ、クラシコフ、ソコロフ等をあげることが出來る。

レニンは、プスコフ滯在中に、これ等の同志達の思想を一定の方向に引きつけ、彼等に深い印象を與へた。彼は當時、勞働階級の鬪爭の指導的中心を建設する必要をば、特にはつきりと自覺してゐた。

後にメンシヴィキとなつたマルトフ、ポトレソフ及び立憲民主黨になつた黨の憎惡すべき敵――スツルヴェ、トゥガン・バラノヴスキイ等も參加し、プスコフで一つの協議會が開かれ、そこで外國において革命的書籍と新聞を發行する計畫案が出來あがつた。レニンは、西伯利に流されてゐた頃から、すべての眞實のマルクス主義者の一團を結成するために、一つの新聞を外國で發行するといふ考をもつてゐた。此の新聞を「イスクラ」(火花)と名づけることも豫定されてゐた。そして

間もなく此のレニンの考へが實現され、外國において新聞「イスクラ」が發刊された。發刊の辭の題名には「火花から焔は燃え立つ」とあつた。

レニンは、ペテルブルグへ潜行した廉によつて再び檢擧された。

彼は三週間監獄にゐて考へた。安んじてロシアで生活する事は許されない、寧ろ外國へ行つて其處から革命的事業を行ひ、書き、宣傳し、組織し、勞働者達を教育し、黨を指導した方が、彼自身のためにも、亦た、革命運動のためにも有利だ——といふことを信ずるやうになつた。

が、その前に、彼はもう一度秘かにウファのクルスプカヤ女史の許へ逢ひに行つた。彼はかうした旅行の機會を、いつも、當時まだ大きな團體になつて居なかつた各地の社會民主派の團體を强固にし、整頓させ、それらと連絡をつくるために利用し、我黨の組織のために準備する事を忘れなかつた。

一九〇〇年七月廿九日、レニンは外國へ亡命した。

七　亡命生活

一　「イスクラ」時代「何を爲すべきか」

レニンは、最後の檢擧と外國亡命前に、大きな都市の大部分を歷遊し、各地において出來るだけ勞働黨組織の基礎を、植えつけて廻つた。同志や團體との間にどうして手紙の往復をするか、宛名の表記をどうするか、といふやうな打合せなどもした。

斯樣にして彼は外國に行つた後も、其處から直ちに多くの同志と連絡し、彼等を指導しうる可能性をつくつた。外國へ行くや彼は直ちに新聞「イスクラ」を發刊し、其の主筆――指導者の一人となつた。外國境を越えて秘かにロシアへ轉送された「イスクラ」は、革命的な力と、革命的活動家とを糾合し、それをば一つの目標へと向けはじめた。

「イスクラ」その他の外國における出版物をロシアへ轉送するには非常な危險が伴つた。いろいろな手段で國境監視の憲兵の眼を胡魔化し、新聞を身體へ卷きつけたり、秘密の鞄（二重底）に入

れて輸送したりせねばならなかつた。もしその荷物が露見した場合には、入獄はおろか、流刑や遠島をも厭はない献身的な人物を必要とした。さうした献身的な人々は、「イスクラ」をロシア勞働者の手へ届けるためには、どんな犧牲をも厭はない覺悟をもつてゐた。今日これを追憶すれば我々全體にとつて、新聞が如何に大きな意義をもつてゐたか、新聞の題銘に書かれた、火花より焔は燃え立つといふ言葉が、如何にふさはしかつたかを感ずるのである。

まことに、小さな火花から、遂に貴族階級と資本家の政權、×××の×××を燒き盡した×××の焔は燃え立つたのである。あらゆる古い制度は、火焔に燒かれたやうに消え去つたではないか。

當時政黨組織の必要は痛切に感ぜられてゐた。それ以前、一八九八年ロシアのマルクス主義者——當時すでに彼等は社會民主黨と呼ばれてゐた——は政黨を統一して、一般計畫……如何に行動し、如何に資本家、地主、帝制政府に對して鬪爭すべきか……——を樹立するため、ミンスク大會を召集した。當時、我々の委員會を「勞働階級解放鬪爭同盟」と呼んでゐた。ミンスク秘密大會には、ペテルブルグ、モスクワ、キエフ、エカテリノスラウリ等の組合、及び猶太人勞働組合「ブンド」の代表者等が出席した。

この大會で、草案だけではあつたが綱領を決定し、黨の中央委員會を選擧し、レニンは機關紙「勞働新聞（ラボチヤヤ・ガゼタ）」の主筆に選ばれた。秘密印刷所を起し、其處から新聞を各都市に向つて印刷頒布することも計畫された。が、レニンは其時此の仕事に從ふことが出來なかつた。彼はたゞ外國にあつて久しく考へてゐた計畫を實行することが出來たゞけであつた。此の大會で、彼は政黨をどういふ風に組織するかの問題で、同志達と大きな衝突をせねばならなかつた。當時、都市における各個の組合、各個の小團體は、いはゆる「舵なし、羅計盤なし」（レニンが或時に言つた樣に手工業式であつた）であつて一般に統一的な指導機關なしで働いてゐた。統一的指導のない所に政黨は存在しない。勞働黨は勞働階級の進歩的分子が一般的鬪爭のために結成し、彼等が統一的指導と統一的プログラムを有つ時に於てのみ組織されるのである。が、其の當時はまだそれがなかつた。先づさうした黨のために準備し、政黨をどういふ風に組織するかを研究する必要があつた。勞働階級の任務について多くの曲解をもつてゐた個々の組合や團體がロシアの都市や郡にはまだ多數に存在してゐた。私は既に、我々の中にも政治的團爭の任務を理解しない經濟派が存在したことを說いたが、また一方には、何のために此の一般的鬪爭の中心を組織する必要があるかを理解し得なかつた同志、自

分の仕事を勞働大衆と結びつけずに、有力な支配者や官吏の暗殺で政府を脅威することを宣傳した同志達もあつた。そこで「イスクラ」派は、之等の人々を結合し、統一し、且つ啓蒙して、政黨が勞働運動を××的闘爭の廣き道程へ導き出すには、どういふ風に政黨を組織すべきかを納得させねばならなかつた。

レニンはいかなる言葉をもつて、又如何にしてボリシェヴイキ派を糾合したか？　彼は、先づ弟一の仕事として全ロシア的の新聞「イスクラ」の發刊を必要とした。此のために彼は非常な努力を拂つた。「イスクラ」は未來のボリシヴェキの周圍に力を糾合する戰闘的機關とならねばならぬ。當時「イスクラ」派と呼ばれた未來のボリシェヴィキたる人々は、黨の全團體のために統一的指導の中心を創設することの必要を力說した。そして全團體から承認される所の指揮命令が發せられるべき中心は「イスクラ」であらねばならぬとした。論文「何から始むべきか」及び著書「何を爲すべきか」に於て、レニンは非常に確信的に、此の考へを述べてゐる。殊に彼の小冊子「何を爲すべきか」は、當時、我々に絶大な意義と影響を齎らしたものである。彼は此の著作において我黨の組織に關する任務を提起し、革命運動のために職業的××家の團體を組織する必要がある、と云

つた。

レニンのかうした思想が我黨の組織に如何に大きな意義をもつたかは言ふまでもない。誰でも古いボリシェヴィキは、彼等自身がすべての仕事の前に試金石であつたことを想起することが出來る。我々は今日、レニンが露西亞を去るに臨んで到る處に連絡を作り――イスクラ派が活動したそれらの各都市では、このレニンの作つた連絡が中心となつて委員會が發達したのを知るのである。その活動はまづ進歩的勞働者と結びつけられ、更に一九〇二年からは農民運動とも結びつけられた。我黨の「イスクラ」委員會は、自からの緊急任務として、これらの運動に正しい見解と方針とを與へてきた。

「イスクラ」は、最初ミュンヘン市（バワリア）で發刊された。そしてレニン、クループスカヤ女史は、其處へ移つた。

私は、當時、レニンの「舊イスクラ」の仕事に關係した同志達の追想の中から、二三の追懷を引用しようと思ふ。

コジェヴニコヴ女史は、「舊イスクラ時代」のうちにかう書いてゐる。

『ウラヂミル・イリイッチは、一九〇〇年に流刑を終へて外國へ逃げだし、自分の周圍に黨員を糾合し、「匿名者」や「職業革命家」の活動の根據地として「イスクラ」を發行しはじめた。その地の警察はあまり酷い制限を加へて壓迫しなかつた。そこには「匿名者」にとつて生活の「心安さ」があつたので、ロシアの流刑地から、また流刑地送りの途中から、大衆的な脫走が行はれはじめた。そして彼等は、外國にある「イスクラ」の編輯所――革命思想の中心、ロシア內地で活動してゐる同志達との連絡の中心へと雪崩れ込んで來た。それから彼等はまた「變名」して實際的活動のためにロシアへ――といふ風に往來した。』

ゼ・クルジヤノフスカヤ女史は「イスクラの意義」の中で書いてゐる。

『「イスクラ」は、ロシアとの間に頻繁な連繫をもつた。權威ある思想の飽和と、組織の中心がそこに作られた。それはロシアの實際生活を直通的に貫ぬく弓として、外國で發行される新聞中の全然新しいタイプであつた。そして其の弦は、主として誰よりもロシアをよく知り、ロシアを感じてゐたウラヂミル・イリイッチの手によつて放たれた。

我々は非常に明るい希望をもつて、ミュンヘンから成功へのスタートをした。ロシアにおける

運動の波は既に高く〳〵騰つて行つた。「イスクラ」は焔となつて燃え立つた。イスクラ委員會の數は急激に增加し、勞働大衆は次第に團體の中へ誘ひ入れられた。この我々の運動の發展と共に、西伯利の流刑地からも變名して國境を脫出し、黨の指揮下に身を投ずる同志達が次第に集まつてきた。彼等は委員會の手で部署を定め、各地への「密輸入者」の手で、外國と國內の間に、秘密出版物の輸送を行つた。彼等は皆な、その頃仕事の「配置」の中心が置れてあつたサマラを經由して、密輸入を行つてゐた。』

ゴレフ君は、西伯利流刑地から脫走の途上、「何を爲すべきか」を讀んで、如何に深い感銘を受けたかを「第二回大會の前」の中で回想してゐる。

『私は其の小冊子を熱病患者のやうに、夜徹し寢ずに一氣に讀破して、激動的な感銘をうけた私は直ちに、新しい匿名(ペンネエム)「レニン」が、ペテルブルグ「鬪爭同盟」の建設者として兼てから知つてゐたヴェ・イ・ウリヤノフだといふことを察した。私は此の小冊子の筆者のうちに、今度は單に理論的方面からばかりでなく、異常に强固な意志をもつた組織力を感じた。その時から私の「イスクラ」に對する親しみは非常に强くなつた。』

當時レニンもクループスカヤ女史も非常によく働いた。その頃「イスクラ」編輯部に働いてゐたコジエヴニコワ女史は、さらに次のやうに語つてゐる。

『イスクラの發刊と發送、ロシアにゐる同志達との連絡、暗號の組立と解讀などの仕事は、すべて編輯部員がやつた。が、主としてイリイッチとクループスカヤ女史がそれをやつてゐた。イリイッチは僅かな食事休みをとるほかは、朝の九時から終日働きつゞけた。私は、彼が芝居や博物館へ行つた事を記憶しない。時々、終日働き盡して晩になつて、彼は急に私に向つて言つた――「サア半時間だけ息抜きに行かう。」イリイッチは何時でも正確に時間を切つて休息した。その時間が來ると時計を眺めて――「あと二分だけ殘つてゐる。早くお茶を呑んでおしまい。行かう」――と言つた。』

二　レニン夫人の追憶

當時のレニンの私生活はどんなものだつたらう？多くの人々は此の問題に興味をもつてゐる。ナデジダ・コンスタンチノヴナ女史は、彼女のレニン追想記「ウラデミル・イリイッチに就て」中で

誰よりもよく、彼を描いてゐる。私が、これを殆んど全文こゝに掲げることを、誰も咎めはしないであらう。

『最近非常に澤山の人々がウラデミル・イリイッチに就て書いてゐる。それ等の追憶の中には、屢々彼が「聖人」か、又は善良な信教家的な家長か何ぞのやうに描かれてゐる。彼はそんな人間ではなかつた。彼は少しも人間放れのした所のない人間であつた。彼は全生涯中に、常に、多方面にわたつて生活を愛し、好んで生活を自分の方へ吸收した。

私どもの生活がまるで窮乏そのもののやうにも書かれてある。それはほんとうではない。私どもはパンを買ふことも出來ないほどの窮乏を味ひはしなかつた。同志の亡命者達が果してみんな、そんな風に暮してゐたであらうか？　一一年間も收入がなく、ロシアからも送金が絶え、文字どほりに飢えた人達もあつた。私どもにはさういふ事はなかつた。質素に暮した――それはほんとうである。が、生活の喜びは、飽喫と贅澤に暮すことだらうか？　イリイッチは生活の中に生活の喜びを求めることを知つてゐた。彼は非常に自然を愛した。シベリヤ時代については茲に言はないが、亡命中にも、私どもは何時でも胸一杯に大氣を吸ふために、何處かの郊外へ

遠く〳〵出かけて行つた。そして新鮮な空氣に醉ひ、運動と感銘に醉つて家路についた。私どもの取つた生活の型は、他の亡命者達の生活の型とはよほど違つてゐた。彼等はお茶を喫み、煙草の煙に蒸されながら際限もなくしやべり合ふことを好んだ。イリイッチは、かうした饒舌には恐ろしく倦怠を感じて、散歩に行かうと言ひだすのが常だつた。私どもの亡命生活の第一年であつたが、ある時、ミュンヘンでマルトフ君とアンナ・イリニチナ（レニン妹）に、我々の好きな場所――野趣に滿ちたイサルの岸を見せやうと、彼等を伴れだした事がある。其處へは、いばら道を越えて行かねばならなかつた。半時も經つと彼等はすつかり疲れ切つてしまつた。私達は彼等を渡船で市の中心まで送りかへし、それから我々だけで「我々の場所」へ行つた。倫敦にゐてさへ私どもは何時も自然の懷ろに融けこむことを工風した。が、あの煤煙によごれ、霧の怪物に包まれた都から脱け出るのは――殊に乘合馬車に一ペンス半以上をかけないでそれをするのは、決して容易な仕事ではなかつた。

その後、瑞西で自轉車を手に入れた時には、私達の散歩の領域は非常に擴げられた。或る時ロンドンで、イリイッチのことを、仕事をしたり博物館に座つてばかりゐる人間だと考へてゐ

た某君が、彼が散歩に行くのを不審がつた。それをヴェラ。ザスリッチ女史が憤慨して「彼は迎も自然が好だもの……」と言つたのを覺えてゐる。――私は「それは眞個だた」と思つた。

イリイッチはその國々の生活情態を觀るのが非常に好きだつた。私達はミュンヘンでも、ロンドンでも、また巴里でも、行かなかつた所はない。彼は、好んで小さなカッフエや、英國の教會で催される色々な社會主義者の集會の廣告を見つけ出すのであつた。彼は獨逸、英吉利、佛蘭西等の勞働者生活の視察を、いつも心がけてゐた。彼等が、大きな集會でなく、親しい同志達の間でどういふことを言ふか、何を考へてゐるか、どういふ生活をしてゐるかを。――たゞ巴里の選擧前の集會にだけは行かなかつた。私達は、住んでゐた國々の勞働者の生活を普通の亡命者達が知つてゐた以上によく知つてゐた。巴里で、私達は佛蘭西の革命家俳優を贔負にした時代があつた。イリイッチは、非常に天才的な革命的俗謠の作者で、同時に歌手であつたモンテギュスと懇意になつた。巴里共産黨員の息子――モンテギュスは勞働者街の人氣者であつた。イリイッチは一時好んで彼の作歌「第十七聯隊の兵士等よ、君等に敬意を表する」を謠つたものである――それは、罷業者に向つて發砲することを拒絶した佛蘭西兵を頌へたものであつた。イリ

イッチには、無自覺な農民にえらまれ一萬五千フランの歳費慾しさに議會で國民の自由を賣つた社會主義議員を揶揄した、モンテギュスの歌が馬鹿に氣に入つたものである。私達には劇場行の日がつゞいた。イリイッチは巴里の場末の劇場のプログラムの中から、モンテギュスが出演するといふ廣告の出てゐる所を探しだした。巴里の地圖を手にして私どもは遠い〳〵場末まで出かけて行つた。其處で群衆と一緒に、多くは佛蘭西のブルジョアが好んで勞働者を教育する感傷的な、猥褻な事柄を仕組んだ戯曲を見た。それから――モンテギュスが舞臺へ現はれた。勞働者達は雷の如き拍手で彼を迎へる。彼は勞働者風に革の服を着て、佛蘭西の勞働者がするやうに頸にハンカチをまきつけ、憤激を歌ひ、ブルジョアを諷刺し、勞働者の相互扶助について歌つた。巴里の場末の群集――勞働者の群集は芝居の筋の中で、聳え立つた流行の帽子をかぶつたマダムが滿場を憤慨させるやうな所へ來ると騒々しく怒鳴りたてた。「畜生！　惡黨！」――勞働者達は部屋借りの若い女を口説く家主に扮する役者に向つても罵聲をあびせかけた。イリイッチは、斯うした勞働者の大衆中に溶け入るのが好きだつた。モンテギュスは或る時、一度我々ロシア人仲間の夜の集りに出演したことがある。そして長いこと夜の更けるまでイリイッチと

對座して、培はれつゝある世界××について話した。巴里共産黨員の息子と露西亞のボリシェヴィキとは、めい〳〵に自分の描いてゐる未來の革命について考へた。殘念なことには、モンテギュスは戰爭になつてから愛國的な歌を書きはじめた。

別の時代があつた。それは――選擧前の演說會廻りである。勞働者達は家に托すべき人がないので、其處へ子供をつれて集まつて來た。民衆を釣り込み、感動させる多くの演說家達を見た。私達は昂奮して辯士を凝視する頑丈さうな鐵工と、父と同じやうに辯士に聽き入つてゐる息子の姿とに惚れ込んだこともあつた。私達は、社會黨議員が勞働者の前でどんな演說をするかを聽いた。それからまた、同じ彼等が智識階級や官吏の多く集まつてゐる演說會で何をいふかを聽きに出かけた。そして勞働者の集まつた會場を搖り動かした、偉大な、熱情的な思想が、おなじ辯士によつて、如何に小ブルジョア向きの柔かい色に塗り換られるかを見た。それは投票をより多く搔きあつめるために他ならない。かうした演說會から歸ると、イリイッチはいつでも社會黨議員を諷刺したモンテギュスの歌を口ずさんだ。

ロンドンでは、大道演說を聽くために私達はよくハイド・パアクへ出かけた。一人が神につい

て說けば、他の者は商店員が如何に慘めな生活をしてゐるかを叫び、第三の辯士は公園改良について述べてゐた。ロンドンの猶太人町ワイト・チェプリへも出かけた。其處でロシア人の水夫たちや猶太人の貧民などと懇意になり、彼等の深い絶望的な歌を聽いたりした。社會主義者の教會堂「七姉妹」へも出かけた。そこでは古い黨員が社會主義僧侶として一種獨特の說教をやる。その前座として若い辯士が地方自治體社會主義について演說してゐた。彼は、猶太人の埃及出征は、勞働者の資本主義支配より社會主義支配への出征の模範だと解さねばならぬ——と說いてゐた。若い辯士は日和見主義的傾向をもつてゐた。』

他のロシアの古い社會主義者たちは、外國に住みながら、或る者の如きは一度も勞働者の集會に出けなかつたが、レニンが外國の勞働者の集會に非常に興味をもち、注意深くこれを觀察したといふことを記憶せねばならぬ。コンスタンチノヴナのいふ所は他の同志達の言つてゐる所と一致する。トロツキイは、最近出版された「レニンと舊 イスクラ」の中で、彼がロンドンへ行つた時、レニンと一緒に非常にたび〳〵さうした集會へ出かけたことを語つてゐる。

『或る日曜日に、私はウラデミル・イリイッチ、ナデジダ・コンスタンチノヴナと一緒に……敬神

的讃美歌を歌つゐるロンドンの社會主義寺院へ出かけた。

たしか濠洲から故國へ歸つて來た植字工が辯士として起つてゐた。ウラヂミル・イリイッチは小聲で、少くとも其時代としては可なり革命的な響きをもつた彼の演說を我々に通譯してくれた。それから全員起立して――「全能の神よ！　××もなく、富豪もなき世になし給へ！」とか何とかさういつた意味で歌つた。「英國のプロレタリアのうちには革命的な社會主義的な要素が多分に植つけられてゐる。だが、それはすべて保守主義と飽和されてゐる。宗教と信仰で固められて、どうしても、外壁を突き破つて自らを自由にすることが出來ない」――教會を出てからイリイッチは我々に向つてさういつた。私はこゝにザスリッチやマルトフ等が全然「イスクラ」の仕事にだけ沒頭して、英國の勞働運動をよそに見て生活してゐた事を、つけ加へるのは興味なきことではないと思ふ。レニンは絕えず、單獨で英國勞働運動の流れを探究してゐた。之については、ゴルフも同じやうに追懷してゐる。

「レニンは晩になるとよく英國人の演說會へ出かけた。（私も數回彼と一緒に出かけた）半ば政治的興味からであるが、半ばは彼が非常に熱心に勉强してゐた英語の實習のためにでもあつ

た。彼は、ある知識階級の英國人について、英語と英文學とを學び、その代りに、彼がロシア語とロシア文學をおしへて交換教授をしてゐた。そのために私がロンドンへ行くまで其處で一年ばかり暮してゐたレニンは、すでに可なり自由に英語を話した。その點で彼は他の亡命者達とは異つてゐた――例へば、ヴェラ・ザスリッチ女史が、店へ行つて買物をする時、品物を指さしてゐたのとは餘ほどちがふ。レニンの唯一の娯樂は、彼が非常に好きであつた、音樂會へ行くことであつた。』

レニンはそのころ、生きた革命運動をもとめそれに奉仕する人々にとつての柱石であり心棒であつた。彼は生來の素朴さと、人おの〳〵の長所を探し出して生きた仕事を與へる識見とで、すべての者を魅了した。例へばトロツキイの如きも、プレハノフとレニンの素朴さとを比べて追想記のうちに書いてゐる。また、ゼ・リリナ女史もやはりレニンがどういふ風に青年達を引きつけたかについて次のやうに追懷してゐる。

『彼がどのやうに人々の前に胸襟を開いたか、またどのやうに伸びつゝある黨の青年たちを迎へたか！　彼は同志達が、何か解しかねて居るやうな時には、それを丁寧に説明し、縷々とし

て倦むことを知らなかつた。ウラデミル・イリイッチに向つてはたゞ「どうも解らないから説明して下さい」と言ひさへすれば、その人が納得の行くまで説明し演繹して訓へてくれた。

青年達は、ウラデミル・イリイッチのこの性格を呑みこんで、尊重し敬愛した。そして些細な事にもそれを濫用したものである――イリイッチのところへ、質問や相談に出かけるのは非常に氣安かつたのである。それについて次のやうなことを想ひ起す。――ジノヴィエフ、ウラデミロフ、及びスタフスキイの三人が、ある時プレハノフとレニンに近づきになるためにベルンからセネヴへやつてきた。あとで彼等は三人とも此の二人との會見の印象を私の前で話した。

「プレハノフは僕等を應接間で引見し、小さな茶碗で珈琲を馳走した。」とスタフスキイ君は曾て私に話したことがある――「僕のやうな勞働者には弱々しい椅子に腰かけて小さな珈琲茶碗に觸るのがあぶなつかしくさへあつた。プレハノフは我々を教へ、且つ教へてばかりゐた。」……が、レニンの所へ行くと彼はいきなり我々を自分の部屋へ案内して長い間お互に話しあつた。そのあとでお茶を御馳走した。彼は我々を臺所へつれて行つた。そこには机の上に湯の入つた藥罐と、茶碗、パン、バタなどが置いてあつた。ナデヂダ・コンスタンチノヴナが茶を入

れてくれた。我々の間ではロシアの形勢、黨内の問題などについての生々とした談がはづんだ。イリイッチの所から去るのが惜まれた――三人とも私にさう話してゐた。

――或る時ボリシェヴィキ派の一人アンドレエフがプレハノフに向つて「あなたが大會の時にはボリシェヴィキと行動を共にし、その後メンシェヴィキ側に行かれたのはどういふ譯ですか、その譯を説明していたゞけませんか」と賴んだことがある。プレハノフは癇癪をおこして――「君が俺に向つてそんな質問をするのはまだ早い。君は、君のお父さんがまだ君のお母さんを追ひかけ廻してゐた時代に、もう俺は社會主義者だつたといふことを知つてゐるか？」と言つたのを覺へてゐる。

プレハノフはかうした警句をもつて我々が非常に心配してゐた問題に對する質問を刎ねつけた。が、レニンは、若いといふ理由で我々を威嚇したことは一度もなかつた。我々の若さは反つて彼を喜ばした。彼は我々と、我々はまた彼とゝもに、何時でも若かつたからである。レニンは、かうして彼の感化を受け、彼のもとに活動し、鬪爭することを學んだ若い鬪員を生長させ、教育したのであつた。

ヴエ・コジェヴェコワ女史はまた言つてゐる。

『何時になつても思ひ出されるのは、ウラジミル・イリイッチから迸ばしる精力と魅力と、彼が何時でも、終日、愉快さうに働いてゐたことである。精力を倦怠させずに、常に、環境に應じて、何事も明日に殘さないで出來るだけ片づけること――さういふ働き方を我々は彼から學んだ。仕事を愛し、責任のまへに恥ぢないやうに働き、仕事を他人に引繼ぐ場合には、自分の爲すべき義務のあるだけは責任を果たし、仕事を正確に着實に、そして仕事に生き仕事を生命のやうに愛すること――を、我々は彼から學んだ。』

三　社會民主黨の分裂――ボリシェヴィキ黨の建設

ボリシェヴィキ黨は一九〇三年に組織された。我々は社會民主黨第二回大會以後――一九〇三年以來ボリシェヴィキと稱しはじめた。この大會は外國で召集された。同大會の多數はレニンに贊成した。マルトフ、プレハノフに對する贊成者より、わづかに數票多かつたゞけではあるが――ボリシェヴィキ（多數派）とメンシェヴィキ（少數派）の名稱は、そこから起つたのである。當時、多くの

人にとつて、その爭點はきわめて些細な事だと思はれてゐた。多く人は何が論爭の種であるかさへ理解しなかつた。マルトフが提案して大會が可決したやうに、黨規の中に、どう言ひ現はされたところで同じではないか？　――さう思ふ者が多かつた。つまり、

『黨の綱領（プログラム）を承認し、黨を物質的方法によつて支持し、而して黨に對し、黨の一つの機關の指導の下に、常に個人的盡力をなす凡ての者を以て黨員とす』

となつた所で、また黨規の第一項がレニンの提議したやうに、

『黨の綱領（プログラム）を承認し、而して黨機關中の一に在りて物質的方法によつても、個人的參與によつても黨を支持する凡ての者を以て黨員とす』

となつた所でおなじ事ではないか――と言つた。然り、實際に於て全たく些細なことのやうである。同大會に出席した古い勞働者が次のやうに語つたことがある。――彼は此の論爭を聽いた時、論爭者の氣が知れなかつた。彼は會場の廊下で論爭者の一人を捉へて、「無用の口舌を弄するナ」と遺つけやうと思つたと。だが、實は、この些細な意見の相違から、後年にいたつて大きな意見の懸隔が生じたのである。最初、問題は、我々は黨の機關に參加してゐる各自――機關内に

親しく個人的參與をする同志によつて政黨を建設すべきであるか、或は政黨のうちには、黨の機關自身には加入せず、言ひかへれば何處か傍の方で働いてゐて、ただ黨に對して個人的盡力を捧げる者をも黨員として數へる政黨を建設するかとが出來る。——といふにあつたと見ることが出來る。

今日では、それをもつと明白にするために、次のやうな例をとる事が出來る。

ロシアには現に露國共産黨を援助する者の團體が存在する——所でかうなるのである。

當時ボリシェヴィキは、たゞ、實際既に黨に加入してその機關中に働き、黨の全決定に服從し其の全決議を履行するものだけを以て黨員とする——といふのである。ところがメンシエヴイキは——現に共産黨を援助する團體には加入するが共産黨員にはならず、自分は共産黨の決議に對して責任をもたないといふ者をも、矢張り共産黨員とせねばならぬ——と考へてゐたのである。

問題は——ボリシェヴィキ並にレニンは、黨の內容を嚴選し、まだ逡巡動搖してゐる色々な人々の波で黨を洪水に陷らせぬことを要求するにあつた。メンシェヴィキは「我々は敎授や中學生達にまで直接に黨機關の內部で働くことを要求すべきであらうか」と言つた。我々は之に對して「さうした敎授や中學生なしでも遺り切つて行けるだらう……たゞ我黨に加入し、黨員として黨內に

活動する勞働者さへより多ければ……」――と答へたのである。

この問題では我々は少數になつた。その代り我々は、勞働階級は如何にブルジョアジイに對抗すべきかの問題、その他の問題において同大會の多數を得た。

當時すでに同大會出席者の多數は、勞働階級は自らの闘爭の中に、人民中の最も壓迫されたる小ブルジョア農民を革命の味方に引入れねばならぬと考へた。ボリシェヴィキは既にその頃××の決定的瞬間には、農民が勞働階級と共に行くといふことを知つてゐた。だから吾々は當時既に、特に農民と接近する方針を立てゝゐた。が、當時のメンシェヴィキは政府と闘爭を行ふ者は、ブルジョアジイ、インテリゲンツィア及び進歩的ブルジョアジイであつて、勞働階級は之等のブルジョアジイの感情を刺激し、且つ彼等を怖がらせてはならぬと言つてゐた。

我々の「ボリシェヴィキ」の名は斯ういふ處から起つたものである。當時ボリシェヴィキを罵して「ベカ」といひ、メンシェヴィキを「メカ」と言つた。兩者の間を彷徨してゐた者を『非ベ非メ』と呼んだ。

後年、我々は別の問題で分裂したのだといふ事がはつきりして來た。その問題とは――革命に

おけるプロレタリアの役割と意義、農民の役割、武力××等に關する問題である。

それは兎も角、ロシアではやがて革命運動が進展してきた。一九〇二年、三年の大衆的勞働者罷業がはじまり、大衆的農民の一揆——大地主の莊園に對する掠奪がはじまつた。インテリゲンツィヤ——殊に青年學生は、國民の大衆が動き出したといふことを感じた。これらのインテリゲンツィヤは突進した。我々は頻々としていはゆる「學生騷動」の起るのを見た。大學生は政府に向つて政治的要求を提出した。又いはゆる自由主義者——ロシアにおける帝制々度を何とか改造せねばならぬ、貴族の支配權をも少し縮少せねばならぬ、そして新興勢力たるブルジョア商工業者の支配權を擴大せねばならぬ、と考へ、またインテリゲンツィヤに參政權（憲法）を與へ、ブルジョア制度の根本には觸れず、資本家と大地主に損害を與へずして、少しく國民の轡を弛めねばならぬ、と考へてゐた教養ある人々——も動搖しはじめた。さうした自由主義者は地方自治派（ゼムストウオ）の中にもゐた。彼等は官公吏、醫師、技師、教育者の間に殊に多かつた。

當時、社會革命黨（エスエル）も古臭いロシアの特異性、ロシアには眞の勞働階級はない——などとの無稽の言葉を繰返しながら政黨の樹立に手をつけはじめた。

社會革命黨（エスエル）は、農民の眞の友だと稱してゐた。（彼等の中の或る者は精神的に眞に農民の友であつたものもあつたが、唯だ眞の途を知らなかつた。さういふ連中の多くは後年エス・エル黨を去つて我黨へ轉じた。）彼らは政府の役人を暗殺して屢々革命に非常に有害な騒ぎを捲き起した。彼等の多くは、さうした手段によつて制度を變革し、自由を獲得することが出來ると考へてゐた、「我々は政府が降伏し――讓歩しないうちは、次から次へと暗殺する」――と言つてゐた。

實際に於ては、自由主義者もエス・エルも、たゞ違つた方法でおなじ方向へ歩いてゐたに過ぎない。エス・エルは皇帝と政府に言つた――「われ等に憲法を與へよ、然らずんばわれ等は射たん！。」自由主義者はまた――「我等に憲法を與へよ、然らざれば彼等は射たん！」と。

そして勞働階級は、見物人として棧敷に殘つてゐた。レニンは當時すでに彼等が革命に對して裏切者の役割を演ずることを豫見した。故に彼は、既に二十一年前に、これらの政黨の行動がプロレタリアの政治的統一の獲得と社會主義の達成と帝制獨裁政府に對する全國民的闘爭を阻害するものである、といふ決議を支持したのである。吾黨の任務は――レニンは訓へた――勞働階級をして自から闘爭に參加し示威のために街頭に立たしめ、單に資本家に對して賃銀の增加を要求

するばかりでなく政府に對して政治的要求を宣言せしめ、我々は勞働者の間のみならず××内にも活動し、軍事革命機關を設け、また、農民殊に貧窮農民の間に××的活動を爲すことにあつた。

地方自治會派その他の智識階級分子が、皇帝や政府に向つて嘆願書を書きだした時、メンシェヴイキは歡喜して「それ見よ、彼等は勞働階級にとつて如何に良き同盟者であるか。勞働階級は、自分からブルジョアジーを怖がらせぬ樣にせねばならぬ――それが最も賢明なやり方である」と言つた。

トロツキイは、レニンとヴェラ・ザスリッチ（メンシェヴィキになつた）との自由主義者に關する、或る會話を傳へてゐる。彼等は當時、憲法獲得のために勞働階級の鬪爭を利用せんとし、社會主義者とも提携した。だが、其の憲法は立憲民主派（カデット）的ブルジョアジーに必要な憲法であつて、勞働者が望んでゐるやうなものではなかつた。その頃立憲民主派（カデット）の首領スツルヴェとミリュコフは外國へやつて來て秘密出版雜誌「解放」まで發行したのである。が、この雜誌は、ツアーの大臣達が滿足を以つて讀んだもので、彼等に國民の彈壓を嗾かし、誠心誠意帝制主義に奉仕し、資本家と大地主とを擁護したものであつた。

レニンは、此の僞瞞を容赦なく曝露した。それがメンシェヴィキには氣に入らなかつた。トロッキーは、ヴェラ・ザスリッチ女史が、如何にレニンの行動を遺憾としたかを傳へてゐる。

「……それ見給へ。いかに彼等が吾々との同盟に努力してゐるか――ザスリッチは、レニンの顏を避けて、が、特に彼に當てつけて言つた――最近の「解放」でスツルヴェはロシアの自由主義者たちに向つて、社會主義者と絶緣しないやうに……でないと獨逸自由主義者のやうな悲しむべき運命が、ロシアの自由主義者を脅かすと云ひ、ジョレスの例を引いて、佛蘭西の急進主義者對社會主義者の例を學ぶやうに求めてゐるではないか?」……

レニンは、輕いパナマ凝ひの帽子を頭にのせて机の傍に立つてゐた。(會議は既に終り、彼は歸りかけてゐた)

「だから、尙さら彼等を叩きつける必要がある」――彼はザスリッチをやきもきさせるやうに、わざと輕く微笑しながら言つた。

「あゝ左うだ、左うだ――彼女はまつたく絶望的に叫んだ――彼等が俄かに好意をもつてやつて來る……さうして我々は彼等を叩きつける?」

「そりやさうさ、スツルヴェは一味の自由主義者たちに言つてゐる――ロシアの社會主義者に對しては獨逸の自由主義者のやつたやうな愚策を取らずに、もつと巧妙な佛蘭西の例を學べ、ジョレスと妥協したフランスのブルジョア急進主義者の流儀……で誘惑し、籠絡し、欺瞞し、墮落させなければ不可ない。――と言つてゐるのだ……。」

四　「貧農に與ふ」勞農の結合

レニンは此のやうに、自由主義やメンシェヴィキの聖人たちを無遠慮に嘲笑し、自由主義者や地方自治會派中の立憲民主派の、虚僞と欺瞞とを曝露しつゝ、勞働階級には勞働階級自身の途が存在すること、勞働階級は徹底的に進擊せねばならぬ事を、指摘した。勞働階級は自分の行動によつてブルジョアジーを怖がらすことを少しも虞れる必要はない。勞働階級はたゞ農民を怖がらせることだけを虞れゝばいゝ。それが「ベカ」と「メカ」の異なれる途であつた。「二つの戰術」――レニンは當時、この問題について書いた著作をかう名づけた。

勞働階級と農民の結合については、レニンは二十年以上も前に說き始めてゐる。彼とその弟子

達は――プロレタリアは××の主動者である、プロレタリアは自己の背後に在る農民及び國民中の逡巡階級を徹底的闘争に導き、帝制政府に向けられたあらゆる運動を支持せねばならぬ、勞働階級は未來の××において出來るだけ自己の行動を農村の貧民、農村の××活動分子と連繫せしめねばならぬ、そしてロシア××が成功し場合に組織さるべき政權は、プロレタリア及び革命的農民の政權でなければならぬ――といふ事を知つてゐた。

レニンは一九〇三年に農民のために書いた著作のうちで、既にこの事を明確に示してゐる。其の著作は「貧農に與ふ」と名づけられた。

この著作中で、レニンは農民に向つて、何故にプロレタリアと結合して自己の敵――ブルジョアジーに對抗して起たねばならぬか、を說明してゐる。

『國家の全制度を××する――仕事は易々たるものではない。其のためには多くの努力と長期にわたる不撓の闘争が必要である。すべての富者、凡ての私有者、すべてのブルジョアジィは、死力を盡して自己の富を固守するであらう。全有產者階級の擁護には、官吏と軍隊とが起ち向ふであらう。勞働者は、他人の勞力によつて生活する寄生階級に對抗するために、一人の如く

結合せねばならぬ。勞働者は全無產者をプロレタリアの一階級に糾合し統一せねばならぬ。鬪爭は、勞働階級にとつて易からざるものであらう。が、それは必らず勞働者の勝利に終る。ブルジョアジー及び他人の勞働に寄生する彼等は、國民中の、最少數を構成してゐるからである。而して勞働階級は――國民中の絕大なる多數である。勞働者對私有者――それは百萬に對する一千を意味するに過ぎない。』（貧農に與ふ）

當時、貧農、農村プロレタリア及び半プロレタリアの階級意識は、富裕農民が大地主（ヰメシチク）に反對してゐたといふ事實によつて蒙昧にされてゐた。レニンは農民に向つて警告した。

『農民の各自は、よく、自己の周圍を觀察するがいゝ。富裕な百姓共が、如何にしばしば支配階級や大地主に反對を唱へるか。如何に彼等が國民の搾取と、支配階級の土地が空しく荒廢しつゝあることを訴へるか。如何に彼等が土地を農民の手に取込むことの必要を目くばせするか――等々を觀察せよ。吾々は富裕農民の言ふことを信ずることが出來るだらうか？　否！　彼等は人民のために土地が欲しいのではない。自分のためにである。彼等は現在、既に分有地も賃借地も自分の掌中に入れた。が、彼等にはまだ足りないのだ。だから農村貧民が、大地主に對

抗して富裕農民と一緒に行くことは長く續かない。たゞ我々は最初の歩みを彼等と一緒に踏出すことは出來る。それから後に、其處で別々に進まねばならぬのである。

何故に此の最初の一歩を、別の歩み――我々の最後の重要な歩みと明確に區別せねばならぬか。農村における最初の歩みは――農民の完全なる解放、農民に對して土地割附をするための農民委員會の設立を要求する事である。我々の最後の歩みは、都會に於ても農村に於ても同一のものである。大地主の手から、ブルジョアジーの手から、全土地と全工場を××し、社會主義的社會を建設することである。最初の歩みと、最後の歩みの間に、我々は更に少なからざる闘爭を經過せねばならぬ。而して最初の歩みと最後の歩みを混同する者は、其の闘爭を阻害し、無意識のうちに農村貧民の眼に脂を塗る者である。

最初の歩みは、農村貧民が凡ての農民と共に踏み出す所のものである。農村搾取者でも、百姓の百人中の一人と雖も、大地主の從屬的契約書を厭はぬものがあらうか。凡ての分子が其處では尚ほ一塊となつて進む。平等權は全農民に取つて必要だからである。有ゆる大地主の從屬的契約書は手に裂かれ或は足に躙られる。が、最後の歩みは、決して全農民が一緒に行ふもの

ではない。此處では既に、凡ての富裕農民は雇傭農民に對立して起つ。此處では既に、我々にとつて農村貧民と都會勞働者との强固なる同盟が必要となつて來る。農民に向つて、彼等は、最初と最後の歩みとを一緒にすることが出來るといふ人は、それは百姓(ムジイク)を欺瞞する者である。それは農民自身の間における貧農と富裕農民間の偉大なる闘爭を忘れてゐる者である』(貧農に與ふ)

レニンは一九〇六年の革命後に起つた現象、及び内亂中に「白」派がソヴィエト政權を轉覆した地方に起つた諸現象の可能性を、すでに當時において豫見してゐる。

『或は――レニンは書いてゐる――富農はまだ直ぐさま大地主(ポメシチク)と手を切り得ずに、大地主の政權を最後まで完成させることを欲するかも知れない。よろしい。それは社會民主黨にとつては非常に望む所である。そして社會民主黨は農村及び都會のプロレタリアに向つて、大地主のもとにある全土地の××と、その自由人民國家への提供の要求を、勸告するだらう。社會民主黨は、農村プロレタリアが其の際僞瞞されぬやう、彼等が最後的闘爭とプロレタリアの完全なる解放のために、より堅固になるやう監視するであらう。

が、或は全然異なりうるかも知れぬ。寧ろ異なり得さうである。富裕農民と多くの智識階級

分子は――惡契約（大地主の）が制限され剝奪されるや、直ちに大地主と提携し、全農村プロレタリアに對抗して全農村ブルジョアジーが蹶起するであらう。その時、我々が大地主とだけ戰ふのは滑稽である。その時こそ我々は當然全ブルジョアジーと戰ひ、先づ鬪爭を有利に導くために出來るだけ多くの自由と、勞働者の鬪爭を容易ならしむるためにその生活の安全とを要求せねばならぬ。

何れにしても、我々の最初の重要なる、變更し難き仕事は……農村プロレタリア及び半プロレタリアの、都市プロレタリアとの同盟を鞏固ならしむることである。』（同上）

レニンは二月革命又は十月革命以後になつて、勞働者と農民との同盟を說き始めたのではない。彼は二十年以上もそれを宣傳し、建設し、鞏固にしたのである。その上、レニンは既に一九〇五――六年に農政問題を提起してゐる。一九〇六年ストックホルムにおける我黨の大會で土地（農政）問題が審議された。當時、レニンは、土地國有の必要――即ち恰かも現在我々が行つてゐる通りの制度の必要を指摘した。

プレハノフとマスロフ等は之に反對して論爭した。彼等は「何うして我々は土地を國家に移

譲する？　もし大地主等が歸つて來た場合にはどうするか？」――と言つた。

レニンは彼等に答へて、

「農民が大地主から土地を××したら、彼は當然、大地主が歸ることの出來ないやうに、全政權が上から下まで國民的民主的であるやうに、全國家を改造すべきであるといふことを、農民の各自が理解せねばならぬ」――といつた。

全政權を上から下まで民主化する、とは何を意味するか？　その時代にはまだ「ソヴィエト政權」とは呼ばなかつたが、それは事實において、我々が一九一七年に實現したソヴィエト政權のことであつた。

更に、レニンがまだ九十年代の初頭に、中產農民に對する我々の態度と、革命における彼等の立場とを充分に說明してゐることを知らぬばならぬ。

おなじ「貧農に與ふ」の中で、レニンは次の如く書いてゐる。

『何處においても、富者と貧者、私有者と勞働者の間に鬪爭が始められる所では、中產農民は中間にあつて、何れに赴くべきかを知らない者である。富者は「お前は矢張り主人――私有者

ではないか。お前は素寒貧――勞働者とは何の關係もない。」――と自分の方へ呼びよせる。而して勞働者は「金持連はお前を輕蔑し、束縛する。お前にはすべての富者との闘爭において我々に加擔する外に救はれる道はない」といふ。この中産農民問題の論爭は、社會民主々義者が勞働者農民解放のために戰つてゐる所では、何處でも、すべての國々に於て行はれてゐる。ロシアにおける此の論爭はいま始まつた許りである。故に我々は、特にこの問題に注意し、如何なる僞瞞をもつて富裕農が中産農民を誘惑するかを明白に觀取し、如何に其の僞瞞をあばき、中農をして彼等の眞の友を見出させるためには如何に彼等に援助を與ふべきかを理解せねばならぬ。もしロシア社會民主々義者が即時に眞實の道に就きうるとすれば、我々は、獨逸の勞働者達よりは、遙かに速く、農村勤勞者と都市勞働者との强固なる同盟を達成し、勤勞者のすべてに對する勝利に向つて、急速力をもつて到達する事が出來るであらう』（貧農に與ふ）

以上はレニンが如何によく農民の諸階級と他の階級との關係を認識し得たかを語つてゐる。殊にレニンは、各種の階級と、その革命に對する態度を分析し、究明する事に於て、我黨中に比肩する者を見なかつた。その後、我々の闘爭は全然、當時のレニンの考への正しき事を立證した。

併し當時、多くの者には、レニンは非常に「狹く」觀察してゐると考へられ、彼を「異教徒」だと言つた。(非妥協的であり狂信的であり、彼が正しいと考へた問題に對しては不羈の忠實さを固持したがために)

また、我々ボリシェヴィキ――レニン派のことを「硬石漢」と綽名した。然り、我々はプロレタリア革命の利益のために必要な場合には「硬石漢」であつた。我々は、屢々我々の傾向から分離した人々と、私的親交や、すべての關係を絶たねばならなかつた。――昨日の親友も、今日の相容れざる敵となつた。

レニンも見解の相違のために善き同志と絶交せねばならなかつた。多くの人々は――レニンは冷淡な人間だ、深い個人的愛着のない人間だ――と思つた。無論、左うではない。が、勞働階級の事業のために分裂を必要とした場合には、彼は、自分の最良の親友――昨日までの戰友との分裂にも突進した。これは彼がその生涯の終りまで續けてゐた所のものである。之についてナデジダ・コンスタンチノヴナは、彼女の追想「ウラヂミル・イリイッチについて」の中で、染々と我々に物語つてゐる。

『ウラヂミル・イリイッチは人間を愛した。彼は熱烈に人を愛した。たとへば彼はプレハノフを好いてゐた。プレハノフはイリイッチの成長の上に大きな感化をあたへ、彼が正しい革命の道を探し出すことを援けた人であつた。その上プレハノフは、彼にとつて長い間の榮光であつた。どんな些細なことでもプレハノフとの意見の衝突をした時には、彼は非常に苦痛を感じてゐた。分裂の後も、彼はプレハノフの言ふことに注意を拂つて常に聽いた。彼はプレハノフが云つた「日和見主義者としては死にたくない」――といふ言葉をどんな喜びをもつて聽き、それを始終繰返したことか知れない。一九一四年、戰爭が勃發した時にも、イリイッチは、プレハノフもその時當然出席する筈であつたロザンヌの演說會で、戰爭反對の提議をする準備をしながら非常に心配して「彼が理解しない譯はないんだが？」――と言つた。同志レペシンスキイの追想記の中に、全然間違つた一ケ所がある。レペシンスキイは――或る時レニンはレペシンスキイに向つて「プレハノフは死んだ、主義の上で、だが俺は生きてゐる」――と言つたやうに書いてゐる。それは有り得ないことである。多分、レペシンスキイが何かの意味を聞き違へたのであらう。イリイッチは自分をプレハノフと對照したことは曾て一度もなかつた。若い同

志達は、共産黨史を研究しても、恐らくメンシェヴィキとの分裂の理由が何であつたかを正確に把握し得ないであらう。

イリイッチはプレハノフを愛してゐたばかりではない。ザスリッチもアクセリロドも好いてゐた。「お前はヴェラ・イワノヴナ（ザスリッチ女史）を見るがよい。それは眞底からの純潔な人間だ」――イリイッチは、私がミュンヘンへ着いた最初の晩にさう言つた。彼はまた、長い間アクセリロドの榮光にも包まれてゐた。

最近、もう彼が死ぬ少し前に、彼はアクセリロドのことを私に訊ね、新聞に出てゐた彼の名を示して――「何（チトー）」と訊いた。電話でカメネフに訊くやうにと私にたのんだ。そして熱心に電話の話に聞き入つてゐた。私が、カルムイコフのことを彼に話した時、あとで彼はまた――「何（チトー）」と訊いた。私は、彼がポトレソフのことを訊いてゐるのだと知つた。私は知つてゐるだけを彼に話して「もつと詳しく調べませうか？」と訊いた。彼は否定するやうにカブリを振つてゐた。「マルトフも矢張り死にさうだといふぢやないか」と彼は發音不能になる少し前に私にさう言つた。彼の言葉の中には何となく柔かい響きがこもつてゐた。だが人間に對する個人的

な愛着がイリイッチの政治的立場に影響したことは一度もなかつた。彼はプレハノフやマルトフを如何に愛してゐても、それが仕事のため必要であつた時には政治的に彼等と絶縁した。政治的に絶縁すると共に彼は彼等と個人的にも絶交した。全生活が政治的闘争に繋がつてゐる彼の如き場合、さうしない譯には行かなかつたのだ。

然しイリイッチの人々に對する個人的愛着は、分裂といふことが想像の外の苦痛となつて現れた。第二回大會でアクセリロド、ザスリッチ、マルトフ等との分裂が避けがたいといふことがハツキリした時、どんなにイリイッチが苦しんだかを今でも覺えてゐる。彼は夜徹し腰かけたまゝ昂奮にふるへてゐた。もしイリイッチが、人々に對する私的愛着に對してあんなに熱烈でなかつたなら、彼はこんなに早く仆れはしなかつたであらう。叡智と自己の判斷と行爲のうちに含まれる政治的良心――本當の此の言葉の深い意味で――が、有ゆる親しみや反感を超越する――といふことは、凡ての人に惠まれたものではない。さうした良心のある者にとつても、それは容易な仕事ではない。

イリイッチはまた人間に對して常に非常な興味をもつてゐた。人間といふものゝ絶間なき「誘

惑」が彼にはあつた。人間のうちに何か面白い一面を見いだすと、彼は其の人間に吸ひつけられた。私はその組織者的天才をもつて彼を魅惑したナタンソンとの二週間の「ロマンス」を覺えてゐる……たゞそれは物語りにすぎなかつたが……。殊にイリイッチはロシアからやつて來た人々に魅せられた。何時もイリイッチがもちだす話題によつて、人々は彼の氣分に卷きこまれて知らず識らず彼の前で自分の魂の善良な部分を現はした。眞實の「私」を披瀝した。それは彼等の仕事の關係にも進行にも結論にも反映して行つた。彼等は知らず〳〵何となしに自分の仕事を詩化し、その仕事についてイリイッチに報告した。イリイッチは怖ろしく人間に魅せられまた仕事に魅せられた。その誘惑は、次から次へとまつはりついた。それは彼の生活を、たゞひなき豐富なものにし、緊張させ、充實させた。彼は生活を、あらゆる生活の復雜さと多面性とのうちに吸收した。聖人（禁欲家）とは、恁うした人間のことではないと思ふ。』

八　第一革命

一　日露戰爭と反亂の勃發

かゝる間に、ロシア政府は日本との戰を劃策した。日本人とは何であるか？　何のために戰爭が起つたか？　戰爭は誰のために必要であるか。これについてロシア國民は何も知らなかつた。晝となく夜となく、軍用列車は東へ〳〵と遠い滿洲に走つた。百千萬の農民と勞働者達は、忠義のために×の途へと送られた。

日本政府は少くとも此の戰爭を準備してゐた。が、ロシア政府は、「日本人ごとき鎧袖一觸にも値しない」――とたかをくくつてゐた。最初、新聞は、勝つた！　勝つた!!　と詐りを報じてゐたが、悲しむべき眞相が判つてくると共に、國民の間に恐ろしい動搖が起つてきた。

レニンは初めから此の戰爭に反對してゐた。彼はこの戰爭から大きな國民的運動が發生すると

いふこと、この戰爭がロシア國民にとつて、さう平穩にはすまないといふことを豫見してゐた。事實、やがて對島海戰で我が艦隊が全滅し、旅順要塞が明け渡され、奉天城外や滿洲平野の各地點で無數のわが兵卒が殺戮されると、軍隊内に叛亂が起りはじめた。

而して、この軍隊及び艦隊の叛亂以前、一九〇五年一月九日、資本家の暴壓と不必要な戰爭とに堪忍の緒を切らした勞働者は、ツアーの前に彼等の重荷の輕減を請願することに決した。――叛亂ではなく、請願に出かけたのである。ツアーに信頼して、十字架、幡旗、聖像、ツアーの肖像などをかついで、行列は靜肅に行進した。彼等は「インタナショナル」を歌つたのでもなく、勞働歌、革命歌を歌つたのでもない。彼等は「神よ救へ、人々は汝のもの！」を歌つたのである。しかるに神信心家のツアー、ニコライ・ロマノフは玉座から彼等に向つて「子供達も姙婦もみな朕の下に來れ、朕は汝等を射殺せん」といつた。

群集がツアーを信頼して皇宮前に集まつた時、ツアーは彼等を射殺せしめた。首都の街上に千人以上の無辜の人々が殺された。この事件が全ロシアの村々、軍隊、艦隊に傳はり、彼等が憤激動搖した時、全ロシアの勞働階級も蹶起した。農民一揆が起つて大地主の莊邸を燒き、「赤い牡雞」

は貴族の邸宅を蹴散らしはじめた。一九〇五年の夏、戰艦「ポチョムキン」を筆頭に黑海艦隊が叛亂した。

黑海艦隊の水兵の叛亂が勃發した時、レニンは×××××のためにワシリエフ・ユーデン君を派遣することにきめた。ワシリエフ・ユーデン君は之について「戰艦ポチョムキンの叛亂とレニン」の中にかいてゐる。

『事件はかうである。黑海艦隊の水兵の間には餘程前から巧みに宣傳が行はれてゐた。殊に宣傳に共鳴した水兵の多くは戰艦「エカテリナ二世」に乘つてゐたので我々は主として同艦に期待をかけてゐた。夏季艦隊演習が近づいたので艦隊は軍需品を充分に積み込んで航海準備を整へた。全艦隊は出航前にチンデル島に集合することとなつてゐた。戰艦「ポチョムキン」は最初に同島に向つて出航し、他の艦はまだセヴストーポリに殘つてゐた。

「ポチョムキン」の水兵は、艦長ゴリコフはじめ幹部將校の苛酷な態度と彼等が官品を偷むのに對して非常な反感を抱いてゐたが、航海の第一日に水兵に腐つた肉の食事を與へたので、遂に彼等は不平を起して抗議を申しいでた。將校等は水兵に對してあらゆる罵倒をあびせて脅迫

し、艦長ゴリコフ（若し私の記憶に間違がなければ）は、短銃をもつて水兵ワクリンチュクを射殺した。水兵等は忽まち銃を手にして反抗し、數分間の格闘の後、全將校を舷側から海中に投じた。叛亂ははじまつた。水兵マトシェンコを首脳とする委員會が選擧され、戰艦は錨をあげてオデッサに向つた。

戰艦「ポチョムキン」叛亂の報はやうやく數日を經て外國に達した。それが亡命革命家の間に如何なる刺激を呼び起こしたかは想像に餘りある。誰も彼も、ロシアへ！　と引きつけられた。ウラヂミル・イリイッチが急用で私を探がしてゐるといつて來た者があつた。私は早速レニンの許へ出掛ける仕度をしたが、その時、彼はもう自分で私の所へやつてきた。話は簡單だつた。

「ユーヂン君！　君は中央委員會の決議によつて、明日オデッサへ出發せねばならぬ」――イリイッチは口を切つた。

「今日でもいゝ……どんな任務で……？」

「任務はきわめて重大だ！　オデッサの同志達が戰艦「ポチョムキン」の叛亂を××××××し得ないといふ危險がある。君は陸戰隊がすぐ上陸するやうにさせるんだ！　何處をどうして

も戰艦に辿りつくやうに努力し給へ！　そして××。××××××××××××××××××××××××！　それから即時、××××××、また徹底的に農民の間に宣傳し給へ！　農民に大地主の××××し勞働者と提携するやうに提議し給へ！　農民に向つてはできるだけ愼重な注意を拂ひ給へ！　既に火蓋の切られた鬪爭において僕は勞働者と農民との同盟に絶大な意義を認める！」

イリイッチは事件に魅せられて昂奮してゐた。私はそれ以前には、彼のこんな態度を一度も見たことはなかつた。殊に彼のそれから先の計畫は私を驚かし不審がらせるものだつた。「それから更に……殘りの全艦隊の××に全力を盡さねばならぬ……。僕は軍艦の多數は「ポチョムキン」に響應すると信じてゐる！　たゞ徹底的に勇敢に行動する必要がある。できたら――至急に僕を迎へに水雷艇を派遣してくれ給へ！　僕はルーマニヤを出發するから……。」

「あなたはそれが全部可能なことゝ眞面目に考へてゐるのですか、ウラジミル・イリッチ？」――私は我知らず口を挿んだ。

「無論！　全然可能だと思つてゐる。……たゞ決定的に敏速に行動する必要があるだけだ！」

彼は確信的につよい語調で繰りかへした。』

レニンの言葉は眞實だつた。我々はこの運動を利用しきらなかつたのである。（私はこれを自分のことゝしていふ。私は丁度その時――一日前に十日間の斷食のあとで監獄から出てきてオデッサにゐたから。――ヤロスラヴスキー。）政府はこの事件を擴大させずに巧みに鎭壓した。

一九〇五年の秋になつて勞働者の運動は益々廣く發展した。事件は遂に、十月總罷業にまで展開していつた。工場、鐵道、郵便、電信は悉く停止した。當時の流行歌に謠はれたやうに「××××はびつくりした、宣布を出した。死んだ奴等に――自由、生きてる奴等は――ふんじばる！」だつた。

一九〇五年十月十七日、ツアーは憲法を約束した。――しかもその翌日、各都市の街上は勞働者達の血をもつて洗はれてゐた。

レニンはこの報道を知ると、彼にとつて非常に危險だつたにも拘らず、直ぐ翌日ロシアに向つて出發した。彼は首都に近く、フィンランド境のクオッカル（フィンランド鐵道の一停車場）へ乘り

こんだ。（ある時は首都にも潜伏してゐた）――そこから運動を指導するためにしば〳〵首都へ出かけた。彼が公然姿を現はすことは非常に危險であつた。私はその當時レニンが首都へやつてきて非常に多くの集會で演壇上に立つたのをよく覺えてゐる。然し我々がフィンランドへ出かける方が容易だつたので、テリオキ其の他の停車場へ行つてそこで會合したり、あるひはレニンの住居へ出かけて行つて指示をうけた。かうした協議會は非常に屢々催された。レニンはその席上で、如何に行動すべきかを教へた。

一九〇五年の末に黨の大會が開かれる筈であつたが、開催されずに終つた。ボリシェヴィキは、フィンランドの北部タンメルフォルスへ集まつた。我々はそこでモスクヴの武力××のことを知つた。我々はその叛亂に參加するために急遽出發し他の都市でも叛亂を起しうると期待した。が、誰も知つてゐるやうにモスクヴの武力叛亂は勞働者等の鮮血の中に鎭壓されてしまつた。地方で起つた叛亂――ハリコフ、クラスノヤルスク、等といづれも同じやうに鎭壓された。敵は勝利を祝福した。

無論、レニンはモスクヴの叛亂勞働者を援けるために出來るだけの力を盡した。アントノフ・

アフセンコは、モスクヴ勞働者のおこした叛亂が擊滅されないやうに、レニンが同君にどんな戰略的命令を與へたかを回想してゐる。

『突き刺すやうな寒い十二月の風が吹く。私は重病で自分の小さい部屋に寢てゐた。輕いノック、精力的な歩調でヴェラ。スルツカヤ女史（一九一七年十一月に彼女はペトログラード郊外でコザックの榴霰彈に倒れた）がはいつてきた。

「さあ！　一緒に行かう！　非常な重大事件です！」

「僕は病氣だよ……」

市の中央。ネヴ河の近く。「新生活」の編輯局。あまり大きくない部屋の机の前に數名の同志。レニンは安樂椅子に……。

「――モスクヴの叛亂は擴大しつゝある。勞働者は勝ちつゝある。ニコライスカヤ鐵道は罷業して陸軍の鐵道隊が動かしてゐる。ペテログラードから軍隊を送らせてはいけない！　モスクヴを支援しなければならぬ！」と彼れは言つた。

誰れかゞ提議した。

「××××××××××××××必要がある！」

「そうだ！　それを實行しなければならぬ。……だが、それだけでは不充分だ！」

――とイリイッチ。

「××××××！　××××××××××××××××××××××××！　××××××！　そこから勢力を膨脹させて行かう！」――と新しい聲。

「いや！――レニンはいつた。――それは絶望的な作戰だ！　大衆との連絡を失はないことが必要だ。君のいふやうにしては、我々は軍隊の輸送を妨害することはできぬ。鎭壓に對抗し得るだけ自分を堅固に備へることはできない。……ところで、軍人連の意見は？」

ハギン君と私とが報告する。

「水兵は武裝解除されてゐる。「ペトロパウロフスク」要塞との連絡は不充分だ。しかし混亂させることはできる。親衛隊は上官側だ。地方軍、鐵道大隊それから工兵隊と……これはこつちのものだ。」

イリイッチは、

「そして彼等は罷業者に代つて働くことを拒絶するだろうか？」

ノギンは確信的に、

「そうだ！」と答へた。

――鐵道大隊と工兵隊とでオフト（工兵のゐる）の××××し、演說會から押し出してゆく組合勞働者に××手渡しする。そしてウイボルグ方面で陣地を堅めてフインランドとの連絡をとることにきまつた。

私は舊將校だつたので指揮官になつた。朝早くからはじめる計畫。

一夜があけた。朝。誰も約束したやうに私の後につゞくものはなかつた。後で知つたが、兵卒等が叛亂を拒絶したのだつた。』

かくてモスクヴの武裝叛亂が鎭壓されて、第一の恐怖が去ると、自由主義者等の本性が露骨に現はれてきた。

メンシェヴィキは我々に向つて武力叛亂を止せと忠告をした。立憲民主派はモスクヴ勞働鎭壓の功績に對して感謝狀を呈した。モスクヴの十二月武力××に對する猛烈な誹謗と罵言がはじまつた。プレハノフまでがその「社會民主主義者の日記」の中に「――銃をとる必要はなかつた。武

力××をはじめる必要はなかつた」と書いてゐる。この時、レニンは×××××××××××××××××××××××××××××××。レニンはその時こう書いてゐる。

『機の熟さないうちに罷業を始める必要はなかつた、×××必要はなかつた――といふプレハノフの意見の中に盛られたもの以上の近視眼的な觀方はない。×××。×××××××××××××××××××××××××××××××××××××××

『十二月事件は一層深刻にマルクスの一つの立場、××は藝術であり、そしてこの藝術の根本的な規範は絶對的勇氣と直進的攻勢であるといふこと――を立證した。我々はこの眞實を充分に咀嚼しなかつた。我々はこの藝術を自ら充分に學ばなかつたし大衆にも教へなかつた。この攻勢の規範はどうしても履行せねばならぬ。我々は今や自分で失つたものを自分のエネルギーで償はねばならぬ。政治的標語に對して團結するだけでは不充分である。更に×××に對する團結をもつて進擊する必要がある。これに反對する者、これに準備しない者は容赦なく革命家の群から叩き出さねばならぬ。彼等を裏切者として、臆病者として放逐しなければならぬ。我々が目印によつて敵味方を見分けねばならぬ事變と鬪爭の日は近づきつゝあるからである。』

レニンは一九〇五年の失敗は我々にとつてたゞ一時的の敗北たるにすぎぬと考へてゐた。彼は間もなく新しい鬪爭がやつてくることを信じ、徹底的にその鬪爭に備へよと說いた。彼は新聞の發行を援助し、一九〇六年のストックホルム大會、一九〇七年のロンドン大會等に於てメンシェヴィキに對抗して我々の鬪爭的戰術を擁護したのである。彼は一九〇六年に次の如く書いてゐる。

『我々は偉大なる大衆的鬪爭、×××が近づきつゝあることを記憶せねばならぬ。×××は

できるだけ一時に起さねばならぬ。大衆はみづから自分が×××、×××、最終的闘爭に進みつゝあることを知らねばならぬ。死に對する勇氣を大衆中に行き亘らせて勝利を保證しなければならぬ。敵に對する進擊は全精力的攻勢であつて守勢であつてはならない――と云ふことが大衆の標語とならねばならぬ。彼等の任務は容赦なき敵の絶滅でなければならぬ。かくて闘爭の機關は可動的に堅固に組み立てられ××の逡巡せる分子も積極的に引き入れられるであらう。自覺せるプロレタリアの政黨は當然この偉大なる闘爭に於て自己の義務を遂行せねばならぬ。』

二　對議會戰術

しかし、勞働大衆の新しい進出が困難だと判つた時、レニンは國會に入つて、多くの人々が「豚小屋」と名づけた國會議場タヴリチスキー宮殿の演壇から、勞働者農民兵卒に向つて××××を絶叫し、彼等を闘爭に呼びよせ結合させるよと勸告した。我々は×××××××××××××××のではない。勞働者と農民とに必要な×××××××××××××はないのだ。我々は國民瞞着の假面をもぎ取るために×××××に入りそこから國民を闘爭に誘ふ必要があるのだ。國會は大地主、實業

家、教授、辯護士、僧侶、及び富農に席を占められ、勞働者からの選出議員はさなネクタイほどの席を占めてゐた。レニンは彼等に、如何にして××闘爭を行ふべきかを教へてこういつた。

『君達は何んだつて教養ある紳士諸君のやうな氣取つた容子で議會演説をするのだ？　諸君は卒直に、百姓的に、勞働者的に、勞働者の要求と農民制度の缺陥と、大地主と資本家との不埒について突つこめばよいのだ。彼等に向つて×××××××××××××××××××××××××××とと約束し、それまで最後の年を生きのびるがいゝと言つてやればよいのだ。さうすれば勞働者と農民とは君達に耳を傾け、君達は如何に小さなネクタイであつても、そこから彼等を闘爭に呼びよせ一體に結成させることが出來るだらう！』と。

この點に於て我黨の議員達は、國會の中で事實非常に多くの役割を演じた。

一九〇五年、體事はペトログラード、モスクワその他の都會で「勞働代議員ソヴエト」の組織といふ所まで進展した。ある地方（クラスノヤルスクとチタ）では「勞兵代議員ソヴエト」さへ組織された。レニンはその當時、我々が一九一七年に踏みかためた革命的型式を、それらのソヴエトのうちに見出したのであつた。彼は秘密の中に「勞働代議員ソヴエト」に出席した。彼は特

にこれらのソヴエトを「勞働階級によつて創造された政治の新形式」だと書いてゐる。その後ロシアの革命が干潮時代に入り、組合の大部分は蹴散らされ、ストルィピン時代の氣味惡い墓場のやうな靜肅が死刑囚の運命を支配した時、レニンは黨内の有力な勞働者の忠告と强請を容れて重い悲しみの心を負ふて再び外國行きを決心した。官憲の監視が彼を隙間なくつけ廻してゐたから。そして新しい鬪爭のために新しい勢力の糾合をはじめねばならなかつたから。

一九〇六年の夏、レニンはストックホルムの第四大會に出席し、土地國有、×××及び國會に於ける行動について更に明白な階級的戰術を必要とすることを主張し、激烈にメンシェヴィキを攻擊した。その後、彼はペトログラードに歸り國境に近いクォッカルに住んで運動を指揮してゐた。一九〇六年の七月、クロンスタットとスヴェアボルグで叛亂が勃發した。レニンはこれらの叛亂の×××××、×××××××××。が、夫れは不成功に終つた。叛亂は鎭壓され、加擔者は、血の沐浴と絞首臺とで片づけられた。

レニンは芬蘭にゐて國會代議員の行動を指揮してゐた。彼は、國會における行動を單に×××のものだと解してゐた。國會は、全國民に向つて割合に自由に勞働者の聲を鳴り響かせうる場所だ

と見てゐた。この意味で彼は國會參加に贊成した。

レニンはまた軍隊内の活動にも大きな業蹟を殘してゐる。一九〇六年十一月に、私は數名の同志達（ナシモヴィチ、チュジャク、エム・トリッセル、イ・ハ・ラヤンツ、デ・カ・ゴンチャロワ女史、エ・カドムツェフ、ペ・カドムツェフ、イ・エフ・ロカツコフ、ゲ・イ・ギムメル等）と一緒にフィンランドのタンメルフォルスで××闘爭團體の協議會を開いた。レニンはこの協議會を非常に稱讃して、メンシェヴィキの攻擊から我々を擁護して呉れた。

三　ロンドン大會

一九〇七年七月、レニンはロシア社會民主黨のロンドン大會に出席した。彼は其處でまたメンシェヴィキとの猛烈な闘ひをしなければならなかつた。當時、各國の政府が如何に我々を迫害したかゞ思ひだされる。デンマーク（コペンハアゲン）からスエーデン（マリメ市）へ。スエーデンからロンドンへ――といふ風に。

ロンドンの新聞は滅茶な雜報を書きたてた。レニンはアナキストだの、彼は皇帝殺しの弟だの

我々の大會はレニンと一緒に有名なアナキストのピヨトル・クロポトキン公が指導するだのと書いた。我々はバルザリ街にある英國フェアビァン協會に所屬する小さな寺院ブラザァホオドに集まつた。

大會における鬪爭は、敵を卒倒させるほど激烈なものであつた。此の大會では多くの問題でボリシェヴィキが勝つた。そして我々はメンシェヴィキと一つ屋根の下に住むことができないといふことが、はつきりと判つてきた。

第二期國會の解散後、多くの人々は再び國會ボイコット說を唱へ出した。一九〇七年の夏、ウイボルグで開かれた我黨の全露會議で、選擧權が改惡されたに拘はらずレニンは徹底的に第三期國會選擧に參加すべしと說いた。

一九〇七年八月、レニンはスツットガルトの國際會議に參加し、ロォザ・ルクセンブルグと共に——社會主義者は「戰爭を×××」を宣言し、帝國主義戰爭を×××××、資本家政府に對抗する×××××と××するために鬪爭すべきである——との決議を提出した。

この大會が終るとゝもに彼れはロシアに歸つた。が、彼が活動しうる可能性のないことは明瞭

であつた。監獄が彼をまつてゐた。彼は放浪を覺悟し、黨の懇請によつて再び外國へ脫れて行つた。

九　第二の放浪

一　清算派との抗爭

レニンの二度目の放浪――亡命の生活は、一層困難ではあつたが、稍や短かつた。それはまことに悲痛な時代であつた。幾千人の勞働者は監獄に繫がれ、幾百人は死刑にされた。幾百人の同志達は遠刑地で足架をはめられ、幾千人かは遠い〳〵際涯へと分れ〳〵に流された。そして多くの者が勞働者を賣り地下的秘密運動の曝露をたすける裏切者となつた。硬骨な勇氣のある連中は砂利を嚙んでも黨内に殘つて活動を續けたいと土龍（もぐら）のやうに深く〳〵地下に潜り込んだ。より勇敢で巧みな者は屢々自分の首を賭けて、或は監獄から、或は流刑地から脫出して新たに仕事の部署へ歸つてきた。

他方、一部の同志たちは我黨を弔ひはじめた。殊にメンシェヴィキは卑劣であつた。彼等はいは

ゆる「清算主義」を唱へはじめた。我々は地下的活動を廢めねばならぬ、地下的政黨はすでに死滅した、それは屍骸だ――といつて黨を弔ひはじめた。たゞ帝制政府が許す範圍で公然の活動をしなければならぬ――と彼等は言つた。彼等はこの公然(合法的)活動に障害になるものはすべて排斥すべきだと言つた。レニンはこの清算派と猛烈に闘つて人々の氣力を支へねばならなかつた既に久しい間「イスクラ」は發行されなかつた。彼は一九〇四年にボルシェヴィキの新聞「進め」の發行をはじめ、後に「プロレタリア」「社會民主々義者」、一九〇五年に「新生活」、更にその後、「波」等々を發刊した。モスクワでは「炬火」を發行した。

今はたゞ消滅した氣力をかき集め、新にそれを繫ぎ合せる必要があつた。そこで彼は外國にゐるマルキシストと共に、勞働者を黨委員會の指導者として教育するための學校を建てた。當時、インテリゲンツィヤの四分ノ三以上は我黨から逃げ出してゐた。彼等は革命の祭日には我々の傍にゐたが、重苦しい退屈な日が來ると忽ち逃げ散つて行つた。レニンは「せめて二十人か――三十人でいゝから進歩的な勞働者を集めてマルクス主義の智識で武裝させねばならぬ。」――と考へてゐた。

かくてレニンは、外國に於て黨の學校を建設し、そこへロシアから進歩的な勞働者を集め、政府の眼を憚ることなく、彼等と共に學び、彼等の中から黨の指導者を仕立てあげることを念としたのである。

レニンはずつと前からインテリゲンツィヤの脱退を見きわめてゐた。アドラトスキーは「レニン追想記」の中に次のやうに書いてゐる。

『一九〇四—五年は、丁度專制政府に對する政治闘爭の黄金時代であつた。大きな政治的事變は次から次へと眩くるしく展開して行つた。レニンは外國にゐたが、既にボリシェヴィキ派の首腦として政治闘爭を指揮してゐた。ロシアと外國にある中央部との連絡は益々頻繁となり殆んど毎日のやうにロシアからゼネヴへ同志達がやつてきた。レニンは新たに來る誰彼に各地の勞働者の狀態を詳細にたづねた。ロシアへ歸つてゆく者には勞働者達が工場生活について編輯部へ通信を送るやうに盡力することを懇々と賴んだ。彼はロシアから出て來た地方の有志に向つて「君達の所では委員會に勞働者が入つてゐるか」と訊いた。若し居ないといへば「それは何故だ?」ときゝかへすのが例であつた。』

二　召還派、求神派との抗爭「唯物論と經驗批判論」

學校創立問題では彼は大きな鬪ひをしなければならなかつた。當時小說家ゴリキーも亦ルナチャルスキー、ボグダノフ、バザロフ、アレクシンスキー等の召還派、求神派、創神派（彼等については下に記す）と共に同じやうな學校の創立に着手してゐた。

彼等はイタリーのカプリ島に學校を創立して各地から勞働者を集め、ボグダノフ、ルナチャルスキー、ポクロフスキー、リャドフ、マキシム・ゴリキー、スタンスラフ・ヴォリスキー、アレクシンスキー等が講義をした。レニンはこれらの同志達と全然意見を異にしてゐたので、彼自身はパリーに學校を創立し、これを我黨の中央委員會の管理の下におきその學校で講義をした。レニンは「土地問題」と「ロシア及外國における組合運動」について、ジノヴィエフは「ロシア革命史」について、カメネフは「我黨の組織問題」について、故インノケン・ドブロヴィンスキー其他の數名は、他の問題について講義した。此の學校の生徒の一人であつた錠前工コスイリョフは、其の學校でレニンと初めて會つた印象を、次のやうに語つてゐる。

『我々がパリへ着いて三日目にレニンに逢はせるといふ約束が出來た。晩になつて我々は新聞「プロレタリア」の編輯局（玄關のやうな一室）にある中央委員會へ呼ばれた。ジノヴィエフが我々を迎へた。ジノヴィエフとの會話は何となくはづまなかつた。みんなレニンの來るのを待つてゐた。やがて隣室から一人の人が現はれて窓下の腰掛に座つた。すり切れたフロックを着て、づんぐりした額の禿げあがつたこの人物には誰も氣をとめる者はなかつた。ジノヴィエフも矢張り別に其の人に氣をとめず我々に對する質問をつゞけてゐた。既に十五分も經つたので、私は我慢し切れなくなつてジノヴィエフに「我々はこんなに長く待つてゐるがレニンは結局いつ來るんです？」とたづねた。ジノヴィエフは噴きだして、脇の方につてゐる其の人を顧みながら「レニン君は既に來てゐるやうだ。」――といつた。みんな笑ひ出した。レニンは近くへ進んで來た。それから會話は非常に活氣づいて來た。やはり我々にとつて初對面のナデジダ・コンスタンチノヴナ・クルスプカヤ女史も入つて來た。彼女は質素な服裝をして、布で頭を包んでゐた。這入つて來るなり暖爐の近くに立つて我々を眺めてゐた。彼女は、話の終りまで其處に立つてゐた。レニンは我々と勉强するために我々のホテルへ出かけて來ることを約束した。正確に、約

東の時間通りに、彼は「ストルィピンの改革」について講義をするために、我々のホテルへやつて來た。

（註）ストルイピンは、大地主的な、獨裁國家制度を維持するため、强固な、富裕な、搾取農民を作るために、農民に對し土地分割を行つた、が、失敗した。後に彼は暗殺されたし――ヤロスラウスキー

ボグダノフ、アレクシンスキイ等の一派は、カプリ島の學校の不成功を見て（勞働者聽講生の一部はミハイル・ザヴォドスキイと共に分離してレニンの許へ去つた）再び新らしい學校をボロニイ市に創立した。が、その學校も同じやうな運命を繰返した。ボリシェヴィキ評議會は、「プロレタリア」編輯局から、この學校に關する決議を發表した。其の決議で、召還派及び創神派によつて創立された學校に對して、ボリシェヴィキは全然責任を持たぬ、といふことを宣言した。

此の召還派、創神派とはどんな黨派であつたか。當時一部の同志達は、レニンを非常に穩和派だと考へ、レニンは右傾し、迷つてゐると考えてゐた。彼等は何をもつてレニンを右傾したとしたか？　一九〇五年、××の波濤が愈々高く騰り、事態が×××××といふ所まで行つた時に、レニンは國會のボイコットを說き、國會選擧への參加は、單に勞働階級と農民を直進的××闘爭か

ら引離すに過ぎない！　――と言つた。が、彼は國會が大きな役割をもつこと、××的勢力がまだ完全に結成されてゐないこと、そして××××××××××説くことが出來るであらう！　こと を觀取した時に、レニンは國會選擧に參加することを勸告した。それは、大地主や資本家と衝突するためではなく、其處から徹底的な××××を行ふためであつた。民衆は國會の演説には耳を傾けるから、レニンは國會を×××に轉化しうると考へ、また其處から勞働者、農民、×等を×××××ことが出來ると考へたのである。然るに一部の同志は、レニンが革命を裏切るものとし、レニンは右翼で、自分達が左翼だと決めてゐた。後になつてこれ等の同志は外國で勞働者代議員を國會から召還することを要求する團體を組織した。これに因つて彼等を「召還派」と名づけたのである。これ等の同志の一部は、當時外國で自分達の機關紙「進め」を發行してゐた。此の新聞の名によつて彼等を「進め」派とも呼んでゐた。レニンは徹底的に彼等と鬪つた。彼等も矢張り革命的秘密行動の撤廢を主張し、「廢止派」――メンシェヴィキと同樣に、それは勞働階級の革命に害を齎らすものだと言つてゐた。

その他、レニンはいはゆる「求神派」及び「創神派」と徹底的に鬪爭しなければならなかつた。革

命に失望した多くのインテリゲンツイヤは、革命に對する信仰を喪つた連中を滿足させるやうな學說を探し求めた。一方、當時の著述家の或者は革命鬪爭に目醒めた勞働階級を滿足せさるために、新しい宗教的建設の必要を說き、宗教と社會主義とは一體である、ばかりでなく社會主義それ自身が新しい宗教である——と言ひはじめた。レニンは宗教問題に對するかゝる誤れる態度を徹底的に排擊し、宗教として社會主義を說くことは單に社會主義が宗教へ轉向する一つの形式に過ぎない——と指摘した。このやうな求神論者とは彼は假籍なき鬪爭を敢てし、彼が當時猛烈にルナチヤルスキイと爭ひ、遂に絕交したやうに、他の親友との絕交も遲疑しなかつた。その上、彼は創神論者にも猛然反對して起つた。當時の創神論者といふのは、やはり新宗教建設を主張した連中の謂ひである。彼等は、國民は自己の鬪爭中に自ら宗教を建設する——と云つた。レニンはこれらの意見の中に非常な害毒を發見したのである。彼は創神論者の一人アレクセイ・マキシモヴイチ（ゴリキイ）とこの問題について多くの手紙を交換してゐる。

レニンはゴリキーに對する一九一三年十一月十四日付の手紙に、次のやうに書いてゐる。

『求神主義（ドゴムカテリストヴォ）と創神主義（ボゴトヴイテリストヴォ）、拜神主義（ボゴトヴオルチエトヴォ）との差は黃鬼が靑鬼と違ふ以上の差別ではない。

色々な鬼や神々、色々な唯心的屍體いぢりに對する反對を表示するためでなくて（凡ての神は屍體いぢりである、それが最も純潔な唯心的な探求し難い神であつたところで、同じことである）青鬼を黄鬼と區別するために求神主義について云々するのは、全然云爲しないよりも、百層倍も惡いことである。

何故かといへば、色々な宗教的概念、色々な神々に關する概念、神様を擔ぎ出してまでの色々な勿體ぶりは、許すべからざる不淨である。殊にそれが民主的ブルジョアジイに寛大に（否な大に喜んで）迎へられるかぎり――特に最も危險なる不淨、最も顰蹙すべき「傳染病」だからである。百萬の罪業、醜汚、脅迫及び肉體的な傳染病は、纖細な、靈的な、最も巧妙な衣裳をもつて變裝した「思想」――神の思想に比べては、ずつと容易に群集の觀破する所となるが故に、遙かに危險の少ないものである。

虎女を姦淫したカトリック僧（それを私は今偶然獨逸の一新聞で讀んだのだが）は神の創造と建立を傳道する無袈裟の僧侶、頑迷なる宗教をもたざる僧侶、思想的な、民主的な僧侶よりは「民主々義のため」には遙かに危險の少ないものである。第一の僧侶は觀破し易く、之を審判し叩

き出すのは容易であるが、第二の僧侶は其のやうに簡單に叩き出せず、之を見破るのは千倍もむづかしい。彼を「審判」することに對しては、「軟弱」な「憐れむべき優柔」な安逸階級が、一人も同意しないからである。』

そして亦た、その頃、マルクス主義の修正――變改を企だてはじめ、マルクスには隨所に誤謬がある、と指摘しはじめた各派の著者や舊マルクス學徒に對しても、レニンは痛擊を加へねばならなかつた。彼等は、更に進んで、マルクス學說を動搖させ擬造する目的をもつた哲學書を刊行しはじめた。當時、レニンは、言はゞ敵の要塞に突擊するために、自から哲學書の中に沒頭せねばならなかつた。彼は、日夜ロンドン圖書館に座り込んで、眞のマルクス主義者ボリシェヴイキに正しい方向を示すために、大きな哲學に關する著作を書いた。彼はこの著作の中で、マルクス哲學の修正は、事實において、我々の鬪爭の全過程の修正であることを指摘し、正しい方向の維持に努力した。彼のこの哲學的著作は、當時の我々にとつては、革命の日における彼の指導にも劣らぬ重要さをもつてゐた。

その頃彼によつて書かれた著作と論文は――論文「マルクス主義と修正主義」及び著作「唯物

論と經驗批判論」である。

レニンは當時において、一般的には相容れざるほどの意見の間隔もなかつたに拘はらず、どうしてもボリシエヴイキに贊成せず、ボリシエヴイキとメンシエヴイキの中間を彷徨遊戈してゐたトロツキイとも鬪つた。レニンには、さうした「平和主義者」が、非常に氣に入らなかつたのである。

一〇　勞働運動の「再興時代」

一　一陽來復

一九一〇年には既に陽氣外れな天候の一陽來復が感ぜられた。勞働者の間に活氣の曙光が現はれてきた。レニンは、これを感ずると共に、新たにロシア內地にボリシェヴィキ新聞の發行のことを考へはじめた。レニンは、メンシェヴィキ――淸算派に加擔せず、當時我々と一緒にメンシェヴィキに反對してゐたプレハノフ老人を自分の方へ引入れることに成功した。カメネフ、ジノヴィエフ、プレハノフ及び國會議員等の聯合評議會で、新聞「ズヴェズダ」(星)の發行が決定された。

レニンは、一九一〇年の末に出た此の新聞へ自分の論文を寄せて活氣を添えた。

一九一一年の秋、レニンはパリーにボリシェヴィキ評議會を開き、黨の中央委員會を召集した。此の評議會へは、流刑地から脫走してきたルイコフ(現人民委員會議長)も招かれた。その他カメネフ、ジノ

ヴィエフ、セマシコ、ウラヂミルスキイ及びツイシコ（革命中に獨逸で殺されたヨギヘスのこと）等も出席した。評議會は中央委員會外國部の改造と、活氣を呈して來た勞働運動の指導に適應する新しい中央委員會の建設組織のために、全黨評議會の召集に着手する事などを決定した。

一九一二年の初頭、レニンはプラァグに全露ボリシェヴィキ會議を召集した。この會議は大きな意義をもつてゐた。長い間にわたる散逸、離散、無指導の時代の後に、新たにボリシェヴィキが一堂に會し、當面の重要問題を決定し、活動の計畫と闘爭の方法とを決定したのである。當時、レニンが注意をむけた重要問題は、進歩的な、革命的な勞働者達の結成と大衆的宣傳とであつた。彼はメンシェヴィキ、清算派その他を含む各種の色彩と小塊から成る政黨を避けた。彼は當時既に「少くても良い方がよい。」――量よりも質――といふ風に考へてゐた。

また一九一一年の夏、レニンは巴里郊外のロンジュモ街にボリシェヴィキ黨の勞働學校を建設し、其處で彼は次のやうな講議をした。

一、經濟學――三十講

二、農業（土地）問題――十講

三、社會主義の理論と實際――五講

此の時代にレニンは主として革命事業のうちに愉悅を求めつゝ緊張した生活を送つてゐた。リゝナ女史は、ロンジュモ勞働學校時代について、次のやうに追想してゐる。

『一九一一年の夏、吾々は一緒にボリシェヴィキ學校のあつたパリー郊外の田舍ロンジュモで暮した。イリイッチは瞬時も休まず一週間に六日を働きつゞけた。その代り一週一日、然し決して日曜日ではない日――レニンの言葉をかりていへば「散歩者の雜踏のない日」に、心ゆくばかり休養した。當時ウラデミル・イリイッチ、ナデジダ・コンスタンチノヴナ（レニン夫人）ジノヴィエフそれから私の四人は皆な自轉車に乘り、朝の六時から晩の十時か十一時まで郊外へと出かけたものである。此の場合、イリイッチが作つた約束は――政治については一言も話さないこと――であつた。最初に出かけた時、私は、もし政治について話してはいけないとしたら、我々はどんな話をするのだらうかと不思議に思つた。だが、私はすぐウラデミル・イリイッチとは、政治に觸れないでも多方面のことについて話をすることが出來るといふことを知つた。』

二　「プラウダ」の發行——新聞戰

一九一二年に新聞「プラウダ」を發行しはじめた。此の新聞に對して帝制政府は直ちに彈壓を加へた。然し同時に此の新聞は勞働者の大衆的新聞となつた。彼等はこれを極力支持し、組合や工場内で新聞のために義捐金を募集し、勞働者生活に關する通信を送り、そして有りと有ゆる方法をもつて新聞を汎布した。今日「プラウダ」を閉鎖すれば、明日は「プーチ・プラウドゥイ」(眞實の道)が出た。「プーチ・プラウドゥイ」を閉鎖すれば、「ゴロス・プラウダ」(眞實の聲)が出た。「ゴロス・プラウダ」を閉鎖すれば「プラウダ・トウルダ」(勞働の眞實)が出た。「プラウダ・トウルダ」を閉鎖すれば「セヴエルナヤ・プラウダ」(北方の眞實)等々が出た。始んど毎號、國境の近くに潜伏してゐたレニンの論文が載り、新聞を中心として愈々多くの勞働者が糾合された。彼は根氣よく他の同志達と一緒に新聞に注意を拂つて之を指導し、常にいろ〳〵な指圖を與へ、其の新聞が勞働者の間に何れだけの讀者を持ち、どれだけの工場で寄附金が集められ、金屬工組合の中のどれだけの分子が味方になつてゐるか、傷病保險の會社統計部に幾何の基金があるか等を勘

定しながら、息子の成長を見るやうに樂しんでゐた。彼はまるで聯隊指揮官のやうな態度で反資本戰に備へる戰鬪力を集結し、手兵を點檢した。

その他、レニンはその頃進歩的勞働者のために發行した雜誌「教育」へも盛んに書いた。また我々は雜誌「保險問題」をも發行した。これ等の凡ての仕事は何時もレニンが指導してゐた。勞働運動の波は愈々騰まつて行くのが感ぜられた。

彼は殆んど毎日のやうにこれ等の雜誌や新聞のために書いた論文をロシヤへ送つたが、當時編輯局に座つてゐた同志達がレニンのさうした論文に對してあまり好意を拂はなかつたといふ挿話を語らねばならぬ。彼等は何時も彼の論文を添刪したり、削除したりしたが、彼はこれに對しては非常に寛大であつた。當時「プラウダ」主筆であつたオリミンスキイ（彼のペンネーム「ガレルカ」は黨内に有名なものである）は次の如く追想してゐる。

『其の頃のやうな條件のもとに新聞の中で働くことが如何に困難だかといふことは眞の文筆家だけが了解しうる所である。多くの執筆者たちは彼等の論文が虐待されるやうな機會が二三回續くと直ぐに逃げ出してしまつた。が、編輯部員は「イリイッチだけは決して我々から去らな

い！」と言つて彼の論文を容赦もなく切斷したものである。たゞ或る時、慥か一九一三年の三月、イリイッチの手紙の中に、「こんな風では新聞に執筆する事は出來ない」といふやうな言葉があつた。これは、彼の論文が數回つゞけて掲載されなかつたのは何ういふ譯だといふ問合せに對して、忙しいのでまだ原稿が讀んでないといふ回答を得た時に、彼が寄越した手紙である。』

この頃になつて進歩的勞働者はレニンのうちに眞の信賴すべき勞働運動の領袖を見出した。社會革命黨やメンシエヴイキ等の反ボリシエヴイキ團體が加入してゐた金屬工組合の役員選擧で初めて我々が勝つた時、勞働者は直ちにレニンに祝電を送つたが、彼に取つてそれが如何なる喜びと報酬であつたかは想像に餘りある。

一九一二年四月二日の「レナ金鑛會社」探鑛區における勞働者射殺事件の後をうけて、勞働運動は政治的、大衆的、暴風的性質を取つて進んだ。遠い西伯利の涯（はて）レナにおける百人の無辜の勞働者の射殺が、勞働階級の×××エネルギイを呼びさましたのである。

一九一四年、戰爭の始まる稍や前にロシアの罷業運動は全地方を把握し、或る所では暴動——

武裝的鬪爭までが行はれるに至つた。然しさうした空氣は一九一四年の帝國主義の嵐（運動に對する罵倒）によつて吹き飛ばされてしまつた。

歷史は新たなる血の頁を展開した。銃砲の叫號、破壞、崩落――、泥血に浸された塹壕の中から×××の太陽が昇り、第三インタナショナルの黎明が輝きだした。

一　世界大戰

一　第二インタナショナルの崩壞

世界大戰の報は、レニンがガリシヤの田舍でナデジダ・コンスタンチノヴナ・クルプスカヤ、ジノヴィエフ、リリナ女史等と一緒に暮らしてゐる時、彼等のもとに達した。

レニンはこの戰爭を早くから豫見してゐた。一九〇七年にドイツのスツットガルトで第二インタナショナルの世界大會が開かれた。當時我々はこの國際的團體が勞働者を勞働階級の正しい行路から引き離すとは考へてゐたが、その頃はまだ第二インタナショナルに加盟してゐたレニンはロザ・ルクセンブルグその他數名の同志と共に、所謂左翼團體を作り、同大會の世界戰爭に關する決議に次のやうな修正意見を提出した。

一、軍國主義（ブルジョア諸國家の××××）は階級的壓迫の主要武器であること。

二、青年の間に宣傳を行ふ必要のあること、

三、單に戰爭の勃發に反對するのみならず既に戰爭が勃發した場合には、その戰爭を迅速に終了させることに努め××××××××××××××××××××××××××××××。

かくてその後、バルカンの分割掠奪のことからヨーロッパの上に戰爭の暗雲が漂つた時にも、第二インタナショナルの社會主義者達は再び同じやうに戰爭反對のために闘ふことを約束した。

レニンは、當時の多數社會主義者の言葉が實行と距離のあることをよく知つてゐたが、まだ彼等に對して好意をもつてゐた。ジノヴィエフはこの問題について次のやうに言つてゐる。

『私は當時レニンと賭けをしたのを覺えてゐる。私は言つた――「ドイツの社會民主黨は戰爭反對の投票をする勇氣がないから、軍費豫算投票には棄權するから見てゐたまへ。」が、レニンは――「いや、何といつても彼等はそんな破廉恥漢ぢやない。無論戰爭に反對して闘ふことはし得ないが、良心の手前と勞働階級から棄てられないためにも反對投票はする。」といつた。』

二人とも見誤つてゐた。始んど當時誰でも見誤つてゐたやうに！　ドイツの社會民主黨は戰爭

遂行のために軍費支出に賛成した。

レニンはこれによつて第二インタナショナルの死滅を知り、戰爭反對をもつて全勞働階級の前に社會主義的義務を果しうるやうな新しい團體――第三インタナショナルの建設のために、力の糾合を圖る必要を感じた。

一九一四年十一月、彼は論文「社會主義インタナショナルの立場と任務」のうちに次のやうに書いてゐる。

『第二インタナショナルは、最も殘念な資本的奴隷制度と、最も急激な資本發達の十九世紀末の三分の一と二十世紀初頭の長い「平和」時代（中間時代）に在つて、プロレタリア大衆の豫備的組織をした事によつて、有益な準備的事業における自らの責任を果した。第三インタナショナルは、資本政府に對する××的進擊と、政治的支配と、社會主義的××××のため有ゆる國々のブルジョアジーに對抗する××とのために、プロレタリア勢力の組織といふ任務が課せられてゐる。』。

レニンは「戰爭を××××！」と宣言した。現在では凡てに於てレニンが正しかつたことを誰で

も知つてゐるが、當時多くの者はレニンを奇驕家、空想家、誇大妄想狂だと評した。レニンが一九一四年十一月に書いた論文のうちに次のやうな一節がある。

『戰爭は基督教徒が考へてゐるやうに「罪業」ではない。それは平和が資本主義生活の正常的形式であるやうに、戰爭も資本主義の必然的な段階である。闘爭的な任務と戰爭反對の××並に之に類する行動を拒否し、武裝せるブルジョアジイに對し××なき闘爭を夢み、絶望的な××其他各種の闘爭なしに××××××を夢みるのは、貧弱にして臆病なる空想家の咏嘆であつて、取るに足らぬ謬見である。階級闘爭の宣傳は戰爭中にありても社會主義の任務である。而して國家間の戰爭を××××××、あらゆる國家間におけるブルジョアジイの帝國主義的武力衝突の瞬間における、唯一の××××××である。「如何なる場合にも平和」を夢みる僧侶的な感傷主義と愚劣なる咏嘆とを打破せよ。(以下三百字餘削除)』

二「テーゼ」戰爭について

戰爭が布告されるや、レニンはオースタリイ官憲に捕へられたが(一九一四年七月廿八日)オー

スタリ！社會民主黨員の奔走によつて解放され、オースタリイから追放されてスウイスに送られ、そこでこの戰爭を×××××すべく戰爭熱と戰ひはじめた。レニンは同年九月有名な「戰爭についてのテーゼ」を書きあげ、中央委員會及びロシアにある黨の主な代表者の贊成を求めるために之を配布し、更に十月上旬之をルガノに開催されたイタリー・スウイス社會民主主義會議の討議に附するため、スウイス社會民主黨の手を經て同會議に送つた。このテーゼにおいて、上に摘錄した一九一四年十一月の論文と同樣の見解を述べてゐる。このテーゼはボルシェヴィキによつて確認され、その機關誌「ゾツイアル・デモクラツト」第三十三號に於て黨の宣言として公表された。その宣言に曰く、

『ドイツ・ブルジョアジーは參戰諸國民の一方の團體にあつて指導者となつてゐる。彼等は祖國と自由と文明の擁護のため、ツアーリズムに壓迫された諸民族解放のため、反動的ツアーリズム絕滅のために戰爭をすると唱へて勞働階級を胡魔化してゐる。しかし事實に於てこのブルジョアジーは、ウイルヘルム二世を長とする、ロシア貴族に叩頭しつゝ、常にツアーリズムの信賴すべき同盟者となり、ロシアに於ける勞働者と農民の革命運動の敵であつた。事實このブ

ルジョアジーはドイツの貴族と共謀して有ゆる戰爭の發生に際し壓迫を事とし、ロシア革命に對抗するツアーリズムの支持に全力を注ぐものである。

實際、彼等は、セルビヤに向つて掠奪的遠征を行ひ、之を分割して南スラヴ民族の國民的革命を絞殺し、同時に彼等から富裕なる競爭者を劫掠せんがため、自由の國ベルギー、及びフランスに向て大軍を送つたのである。ドイツブルジョアジーは彼等の側が防禦の位置に立つてゐるとの虚説を流布しつゝ、實際に於ては對露對佛戰爭の豫定計畫の下に準備せる新武器を以て武裝を終り、最後の軍畧的完成を利用し彼等にとつて最も便利なる戰爭の瞬間を撰擇したのである。

參戰國民の他の團體の指導者としては英國とフランスのブルジョアジーが立つてゐる。祖國のため自由のため文明のためにドイツ軍國主義及び專制主義に對して戰爭すると唱へて勞働階級と勤勞者大衆を胡魔化してゐる。事實に於て、これ等ブルジョアジーは既に久しく對獨攻擊のために數十億金を投じ、ヨーロッパに於て最も反動的にして未開なるロシア帝制主義の軍隊を傭ひ入れて準備してゐたのである。』

このボリシェヴィキの「宣言」は、更に戰爭と××の未來の進行を次の如く斷定してゐる。

『無產階級のインタナショナルは過去未來を通じて死滅しない。勞働大衆は有ゆる障害を經て新しきインタナショナルを創建する。日和見主義者の現在の支配は永遠のものではない。戰爭の犧牲が多ければ多いほど勞働問題に對する日和見主義の變節と各國の政府及びブルジョアジーに對して××××ける必要とが勞働者にとつて明白になつてきた。

現在の帝國主義戰爭の××××はパリ・コンミユンの經驗によつて示され、バーゼル決議（一九一一年）によつて決定され、文明の發達せるブルジョア强國間に於ける帝國主義戰爭の諸相から生れ出づる所の唯一の正當なるプロレタリア的標語である。（以下百四十字削除）』。

一九一五年三月、レニンは外國にあるボリシェヴィキ諸機關の評議會を召集し、戰爭に關聯した重要問題につき戰鬪的方針を樹立し、同會は「革命的社會民主派の標語」を可決した。この標語は後に至つて共產黨インタナショナルの根本思想となつたもの〻全部が盛られたもので、殆んどレニンによつて起草されたのである。（以下六百字餘削除）

ロシアではメンシェヴイキのマルトフ、社會革命黨のチェルノフ等も非戰論を抱いて起つたが、彼等は眞に戰爭に反抗する氣力なく、從つて自ら惑亂し他人をも惑はしたに過ぎなかつた。最初

チンメルワルドに於て、それからキエンタールに於て非戰論社會主義者の會議が開かれた。この會議で多數は猛烈にレニンに反對した。レニンはマルトフ等に向つて、彼等がブルジョアジーの手先であるとの攻擊を發せざるを得なかつた。ジノヴィエフは、ラコフスキイが之を憤激してレニと摑み合ふほどの騷ぎを演じたと語つてゐる。彼等は×××に事を起さうともしなかつた。ジノヴィエフはいふ。

『私はチンメルワルドに於けるレニンとレデブールとの衝突を記憶してゐる。レデブールは「君達は外國に住んでゐて×××の號令をかけてゐるのだ。諸君がロシアに住んでゐたら之をどう取り扱ふかを拜見したいものだ」――といつた。レニンは冷靜に答へた。「マルクスが「共產黨宣言」を書いた時に、彼はやはり外國に住んでゐた。それをとがめるのは少數の素町人だけだ。僕は今外國に住んでゐる――レニンは語調を强めた――何故なら、ロシアの勞働者達が僕をこゝへ送つたからだ。だが、時が來たら、我々は自分の部署へつく勇氣をもつてゐる！」と。』

レニンがこの言葉を反古にしなかつたことは誰も知つてゐる。彼は何時でも戰鬪的部署について生活し活動してゐた。（以下八百餘字削除）

三　スイスに於ける生活

戰爭に關するレニンの言葉は、はじめは孤立的であつたが次第に幾千百萬人の聲となつた。それはやがて××へ、××へ、都會へ、農村へと浸透し、覺醒、動搖、××となり、戰爭に對する憤激と××の聲を呼び起こすと共に、×××を呼び醒し、戰爭反對の力の糾合をたすけた。レニンは檄文に或は評議會に、眞のインタナショナリストを團結させることにつとめた。當時のレニンの生活についてジノヴィエフは語つてゐる。

『レニンは、戰爭の頭初から全然特種の役割をもつてゐた。彼は最初、インタナショナリストの小團體を糾合しはじめた。スイスの小さい天地で、彼がその仕事に、いかに不撓不屈の精力を傾けたかを知らねばならぬ。彼はベロンに住み、その後、チユリヒで暮らした。スイスの社會民主黨は始終防衛主義に眩惑されて、我々の周圍には僅かの勞働者の團體が集まつてゐたにすぎなかつた。レニンは何とかしてチュリッヒの青年勞働者からなる十人か二十人の團體を組織しやうとして、非常な精力と時間とを費やしたのである。

『私は當時、スウイスの他の市に住んでゐたが、レニンがこの餘り大きくない仕事に有ゆる力を打ち込んで熱中してゐたのをはつきりと覺えてゐる。彼はスウイス人の間で活動するやうにと色々な手紙を送つて我々を惱ましたものである。チユリッヒで彼が左翼社會民主黨の七人の若いプロレタリアを團體へ引き入れることに成功し、若しかすると八人目を引き入れることが出來るかも知れないといふことを知らせて來た手紙には、愛子を得たやうな歡びが書かれてゐた。

その時、安逸的なスウイス政府は、レニンを危險分子として追放しやうとしてゐた。スウイスの社會主義者モオア君は、我々が當時スウイス政府に入れた「靜かにしてゐる」といふ一札が、最近歷史的文書として博物館に送られたと言つてゐる。

一九一五――一七年の間、レニンはスウイスで全く特種な生活をした。戰爭とインタナショナルの破産とは非常にレニンの心を傷めた。彼を知る多くの同志達は、開闢以來の彼の變りやうに驚いた。彼は何時も決してブルジョアに對して丁重な態度をとらなかつたが、戰爭が始まつてからの彼には、一種の凝視的な、磨ぎすましたやうな鋭い憎惡が現はれた。

チユリヒに於けるレニンはどん底的な貧乏街に住んでゐた。靴屋町の殆んど屋根裏に近い所